

41653

教科書文庫

4
810
41-1938
20000 30331

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

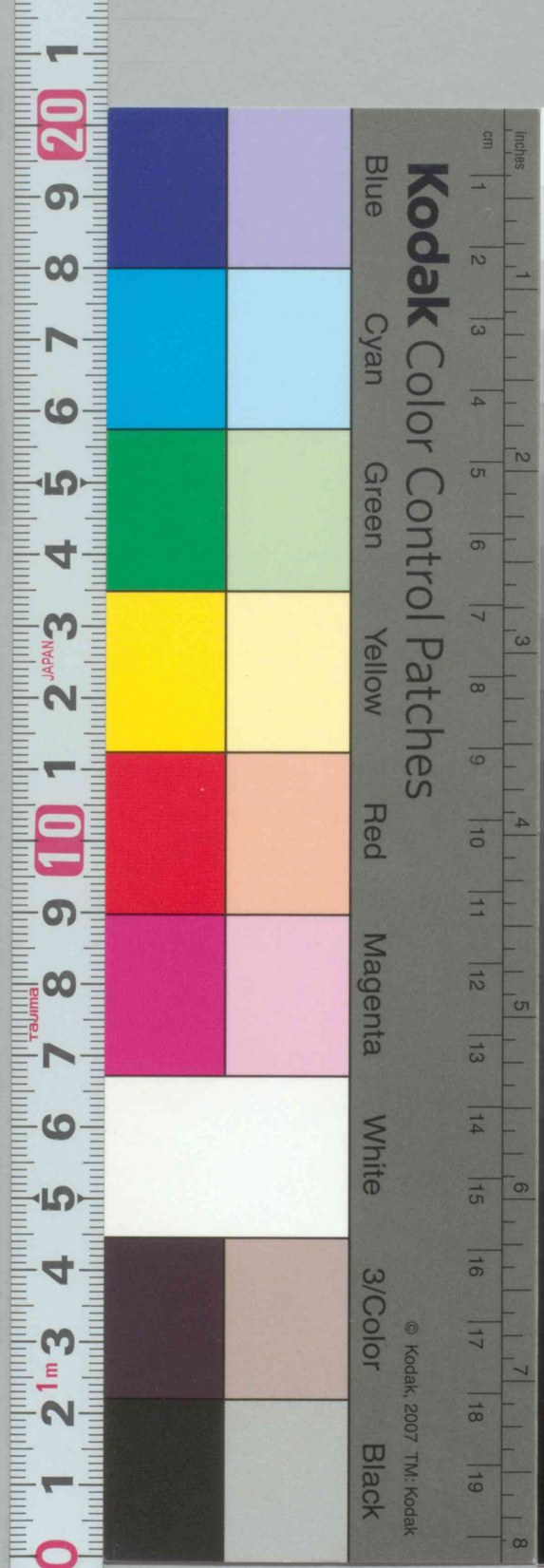


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
T010
資料室

新制國語讀本

新教授要目準據

卷八



英之
無名
不年

3759
To 110

日一月二年三十和昭
濟定檢省部文
用科語國校學業實科文漢語國校學中

學習院教授 東條操編

新制國語讀本 卷八

新教授要目準據

東京 大阪 三省堂

英文
無名
不年

30747

補流

幽言閑寂

今も人もあつても
 けしきもあつても
 月もあつても
 花もあつても
 仲丸
 あまのものを
 すまらぬもの

(照参課八第) 集歌和今古本永元

広島大学図書印

広島大学 教 30331 蔵

卷八 目次

- 一 日本趣味
- 二 秋の力
- 三 落葉を焚く
- 四 熊野落
- 五 頼山陽
- 六 月の前
- 七 歌人西行

目次

- 芳賀 矢一 一
- 綱島 梁川 八
- 河井 醉茗 二
- (太平記) 一四
- 朝比奈 知泉 二二
- 上田 秋成 三〇
- 藤岡 作太郎 三九

八 古今調と新古今調

(諸家) 四四

九 故郷の花

(平家物語) 四八

一〇 平家の末路

高山樗牛 五二

一 清盛入道

五二

二 都落

五六

一一 年々随筆抄

石原正明 五九

一月

五九

二 ゆふべやまさりたらむ

五九

三 菊

六〇

四 紅葉

六〇

一二 自然

島崎藤村 六二

一三 鼠の文づかひ

井原西鶴 六五

一四 千里が竹

近松門左衛門 七一

一五 壬子試筆の詞

室鳩巢 八〇

一六 國體の精華

穂積八束 八三

一七 朗詠

(和漢朗詠集) 八九

一八 四季折々

上島鬼貫 九一

一九 梅花の氣品

豊島與志雄 九五

二〇 表現せざる表現

志田義秀 一〇二

二一 羽衣

(謠曲) 一〇九

二二 末ひろがり	(狂言記)	一一六
二三 岡部日記	賀茂真淵	一二四
一家路		一二四
二箱根山		一二六
三岡部の家		一二八
二四 國學者の業績	岩城準太郎	一二九
二五 日本精神	小西重直	一三六
二六 近古の文學		一四七

—目次終—



新制國語讀本 卷八

芳賀矢一

文學博士。元國學院大學學長。國文學者。福井市の人。昭和二年歿。年六十一。

清幽
楚邃

ナハ人ニ
マフクシク
シニシク
キク

一 日本趣味

芳賀 矢一

古代人類も美しい曲玉マカを造つて身の飾とした。眞澄の鏡を造つて自分の姿を映した。鋭利な刀劍を造つて武者振ひした。情熱燃えるが如き歌も詠んだ。優婉にして花の如き文章も綴つた。山水の間に逍遙しては、その幽邃を探り、その清楚をたづねて或は美想を吐き、或は雅趣を抒べた。花の散るのにも涙を濺ぎ、鳥の啼くのものにも心を傷めた。かくして自ら慰めたばかりでなく、時には之を以て人と人との愛着アハキを告げ、時には之を以て人と神との交渉に用ひた。これ趣味が高かれ低かれ、人間生活の一大要素たるを

示すものである。

趣味生活は知識の進歩につれて向上すべきである。かの知識の點からは批評するに足らぬほど蒙昧な時代においても、趣味性の自由に發育した民族には、後世から見ても驚かれるほどゆかしい趣味生活を營んでゐたものもある。たゞ古代における趣味の種類と範圍と程度とは、單純で、狹少で、かつ低級であつた。

理知の進歩につれて、趣味性よりする文化生活も廣汎になり、複雑になり、かつ高尚になる傾向のあるのは勿論であるけれども、情操の涵養を放漫にしておく時は、理知の進歩が必ずしも趣味生活を高尚に導くとは斷言されるものでない。

我が國史上にあらはれた趣味もまた同じく此の徑路を辿つて、今日に及んでゐる。趣味史の上から民族や國民の特性を觀察するのは、頗る興味あることである。我が日本國民の文化生活はそ

情操

萬葉集

二十卷。撰定年代及び撰者未詳。我が國最初の歌集。仁徳天皇の頃から淳仁天皇の御宇に至るまで、約百三十年間の和歌が收められてゐる。

人麿

柿本人麿。歌人。持統・文武の兩天皇に仕へた。傳未詳。

赤人

姓は山部。聖武天皇に仕へた人。歌人。人麿と並び稱せられる。歿年未詳。同工異曲

の由來する所が甚だ久しいもので、夙に外國から輸入した文化を能く同化して、我が國民自身の文化生活を向上させて來たのは、我が理知性と趣味性との偉大なことを物語るものであらう。

素盞鳴尊の詠歌、天鈿女命の舞踊の如きは、遼たる神代の事蹟であるにしても、神武天皇の御製が幾首も傳はつてゐるのを見れば、天皇の御性格が優雅にましました程も察し奉られるのである。

爾來我が國に文學趣味が普及して、萬葉集をはじめとし、二十一代集や諸家の集を讀めば、人麿や赤人とか、六歌仙とか、三十六歌仙とかの歌その物の文學的價値よりも、菅原道眞が配所の月に吟じたのや、阿倍仲麿が唐土の月に詠じたのや、八幡太郎義家が遠征の途上に落花を惜しんだのや、後鳥羽上皇が隱岐の島守とならせられながら歌の御會を催されたことなどは、同工異曲な趣味の發揮をなつかしませるのである。

耽溺

正宗

五郎入道と稱した。相模國(神奈川県)の刀匠。康永二年(1353)歿、年八十。

義弘

備前國(岡山縣)の刀匠。文保頃の人。

吉光

山城國(京都府)粟田口の刀匠。正元頃の人。

宗近

三條宗近といふ。山城國(京都府)の刀匠。

安綱

備前國(岡山縣)長船の刀匠。應永年間の人。

友成

備前國(岡山縣)の刀匠。永延、正暦頃の人。



出雲大社本宮背面

文學趣味のみに耽溺すれば人間の性行が優柔不斷に流れ易い。我が國民は本來尙武の氣象にも富んでゐる。随つて甲冑刀劍弓矢などの武具の製法にも大いに意匠を凝らしたものがあつた。中にも刀劍の製法には熱誠を捧げたものが多く、名工としては、正宗を第一として、義弘、吉光、宗近、安綱、友成、則宗など、日本刀の威名を恣にしてゐる。畏くも天皇の御身で鍛刀の術に長けさせられた御方もあつた。幾百回の鍛冶研磨を経た名刀は、秋水滴るばかりで、明玉の上に一塵の塵も止めないやうな崇高さである。刀の鑄や目貫などに美しい意匠を凝らしたのも澤山ある。建築の方面を観るのに出雲大社、伊勢の

則宗

備前國(岡山縣)の刀匠。菊一文の祖。仁平、建保頃の人。

天皇の御身で云

後鳥羽天皇を申す。

皇大神宮、奈良の東大寺、平安時代の古社寺を始として、金閣寺、銀閣寺、日光の東照宮、舊幕時代の各城郭より一般都鄙の民屋の構造、庭園の風致に至るまで、その目的と位置とによりて、規模様式は千差萬別であるけれども、何れも、皆我が國民の頭腦中に描かれた意匠と趣向との反映であるの一である。

室内生活に就いて考へて見るのに、間取の工合、床の間、欄間の掛物額にも、陶磁器、漆器の繪模様にも、彫刻物などにも、我が國民の精神が發露されてゐる。殊に富裕にもあらぬ家庭にさへ、茶生花、琴、三味線を玩んで居るのは多年修練して來た風雅な生活ぶりではないか。茶道が我が國民の生活に韻致を加味したことは、争はれない事實である。茶味と禪味とは三にして一、一にして三。この三味は渾融溶化されて、我が國民の腦裡に深く浸潤し、生活の各方面に流れ出てゐる。江戸時代は正にその渾成期であつた。

茶 禪 味
俳 味 味
渾 成

宗匠

銀閣寺に往つて観ると、今日でも四疊半の瀟洒な茶室で抹茶の接待を受ける。それで遊覽者はおのづから義政將軍の風韻を想像するのである。豊太閤に至つて茶の湯は更に盛んとなつた。紹鷗だの利休だのといふ名人が頭を擡げて一代の宗匠ぶりを示した。茶の湯には清寂簡素を尙ぶけれども、目に見えぬところに一種の凝があつて言ひしらぬ風韻を呼び起すものである。そこで是に幾つも流派が出来て普く茶道が傳播して來た。

禪味の傳播は宗教的ではなく、武士たるものの一種の精神修養上から味ははれて、その深沈靜慮の工夫が武士的修練に適するとされたからである。武士で參禪するものは少くなかつた。茶の清寂と禪の沈靜とは共通點がある。俳諧もまた歌の優趣に似ず、婉麗に流れず、嬌態に走らず、卑俗と見えて脱俗したところ、民衆的であつて閑寂の一體を成したるところは、茶味禪味と合致しや

俳諧

すい點がある。

着物の紋所は先祖を崇び、系圖を重んじた我が國風から出たので、世界に無比なものである。而も意匠にあらはれた嗜好にも、日本人の國民性がほの見えるのである。

今や外國思想の輸入は底止する所を知らず、我が國民の之に對する態度は、たゞ好奇心に驅られるばかりで、咀嚼玩味と選擇取捨とに意を用ひる暇がなく、外國趣味の歡迎せられてゐるものの中には、輕浮で醜穢なものもあつて、從來の國民性を傷つける憂ひがある。民族心理學や歴史哲學の研究上から品評すれば、低級な趣味生活に甘んじてゐる國民は賞揚しようとしても賞揚することは出来ない。我が國民たる者も一時の迷夢から覺めて、眞に日本趣味の向上を計らなければならぬ。

(日本趣味十種)

底止

二秋の力

網島梁川

網島梁川
名は榮一郎。倫
理學者。明治四
十年歿。年三十
五。

あれこれを云々
「あれこれを集め
て春は麗かな」
雲根 (芭蕉)

碧落

秋
の
力

「あれこれをあつめて霞む春の臙を、人生の夢とも見れば、秋は直ちにこれ覺醒なり、事實なり。蔦紅葉の中より露れ出づる節くれだちたる樹身、枯芝生の底より躍り出づる偃蹇たる雲根、いづれか秋は人に迫るの事實たらざる。中にも秋の力を最も強く瞻に言ひ出づるものは、黄柚なり、赤柿なり。一美術家語りて云はく、われ會てひねもす秋を郊外に探りて秋に會はず、歸路會、夕空鮮やかに結び出でたる赤柿の累々たるを見て、始めて秋こゝにありと叫びきと。げにも、秋の姿をさながらに具象にして描き出だせるものありとせば、それは碧落の空に躍如として結び出でたる赤柿を描きてはまたとあらし。秋は實に箇の累々の赤柿、その全幅の表現を得たる趣あるにあらずや。そのむかし、蕪村抱一などいふ畫家が、寥

淵默

風岸



寥たるこの一物に、大膽なる落想をこめて、一幅の秋のこゝろを勁く限なく淋漓揮灑し出だせる、詩眼流石に凡にはあらざりけり。見よ、秋の潭に淵默の智あり、秋の空に剛明の象あり。月は清輝を帯び、星に聲あり。落葉に埋もるゝ枯井の水、なほ鬢眉を鑑する。く、夢を歌ふ満園の蟲しぐれ、人の深省をいざなふ。空際ははやかに走る波濤の山、極目鮮やかにくねる一河の帶、樹間の聲の錚々として勁き、天籟地籟の碎泝として厲しき、あはれ、秋の萬象、何物かすべてこれ、空明照徹、剛克雄健の、一氣を以て貫かざる、何物かすべて、哲人の雄姿、道士の風岸を以て人

婆娑

に迫らざる。秋は夢に非ずして、事實なり。人は秋に立つて、直ちに事實と面相接するなり。秋は何等の天文地采の形式を藉らざる、裸體のまゝなる思想なり。そは如々たり、故に明瑩なり、澄徹なり、而してまた充實なり、豐贍なり。春草の紗、夏木の衣、すべて名残なく脱ぎすてて、あらはなる葛蘿の筋、樹幹の骨、健くもまた雄々しき丈夫神の面影は、げに秋にこそふさはしけれ。もし秋に一味の文采ありとせば、白蘋紅蓼の裳、裾蘆花淺水の帶、桔梗刈萱尾花が波の袂も、輕き姿なるべし。あはれ、その澹如たるすゝしさは、かの哲人道士の婆娑たる一衣の高風にも似たるかな。至竟、秋の力は、その衣にあらずして、赤裸々の事實にあり、思想にあり。

(病間録)

河井醉茗
名は又平。詩人。
堺市の人。明治
七年生。

三 落葉を焚く

河井 醉茗

秋晴の朝、庭守は

黄なる樺なる、雌黄なる
木の葉、草の葉うづたかく、
火をうつさんとかままりぬ。

夜にうるほひし露霜も、

一葉々々に乾きゆく

煙のかげに立添ひて

葉守の神やあらはれむ。

眞夏大野を覆ひたる

葉守の神

國つ鎮めの公孫樹こうそんじゆ

光に透いて金葉の

みな地に落つるひゞきかなひゞき

櫻の精は遠春の

海を渡りて去りにけり。

朽ちてはかるき乾き葉の

梢はなるゝ力かな。

常緑ときはなるべき檜葉杉葉ひのきは

うらがれたるがめらくとと、エマ

火になりやすき秋のはてあき

地の美は空にをさまらん。

機にかゝれる織ぎぬの

自然のあやのまばゆきも、

捲かるゝまゝに彼方なる

はてしなき手に渡されぬ。

あゝ落つる葉に驚いて

煙をあぐる庭守よ、

萬葉マンヤク焚いて盡きせざる

林に入らばをのゝかむ。

太平記

四十卷。作者末
詳。花園天皇の
文保二年(七〇
から後村上天皇
の正平二十二年
(三三)に至る凡
そ五十年間の軍
記物語。

大塔宮
後醍醐天皇の第
三皇子護良親
王。延暦寺の大
塔に居られた
ので大塔宮とい
ふ。建武二年(一
三〇)足利直義の
爲に弑せらる。
御年二十八。
般若寺
奈良市外に在
る。

一乘院
奈良興福寺の北
に在った同寺の
末寺の一。

四 熊野落

太平記

大塔宮二品親王は笠置の城の安否を聞召されむ爲に、暫く南都の般若寺に忍んで御座ありけるが、笠置の城すでに落ちて、主上囚はれさせ給ひぬと聞えしかば、虎の尾を履む恐れ御身の上に迫りて、天地廣しと雖も御身を隠さるべき所なし。日月明らかなりと雖も長夜に迷へる心ちして、晝は野原の草に隠れて、露に臥す鶉の床に御涙を争ひ、夜は孤村の辻にたゞずみて、人を咎むる里の犬に御心を悩まされ、いづことても御心安かるべき所なかりければ、かくても暫しはと思召されけるところに、一乘院の候人按察法眼好專、いかにして聞きたりけむ、五百餘騎を率して、未明に般若寺へぞ寄せたりける。



大塔宮危難を免れ給ふ

をりふし宮につき奉りたる人一人もなかりければ、一防防ぎて落ちさせ給ふべきやうもなかりける上、隙間もなく兵すでに寺内に打入りたれば、紛れて御出あるべき方もなし。「さらばよし自害せむ。」と思召してすでにおしはだ脱がせ給ひたりけるが、事かなはざらむ期に臨んで腹を切らむことはいと易かるべし。もしやと隠れて見ばや。」と思召しかへして、佛殿の方を御覽するに、人の讀みかけて置きたる大般若の唐

ひきかづく

櫃三つあり、二つの櫃はいまだ蓋をあけず、一つの櫃は御經を半ば
すぎ取出して、蓋をもせざりけり。この蓋をあけたる櫃の中へ、御
身を縮めて伏させ給ひ、その上に御經をひきかづきて、隠形の呪を
御心の中に唱へてぞおはしける。若し搜し出されなば、やがて突
き立てむと思召して、氷の如くなる刀をぬいて御腹にさし當て、兵
「こゝにこそ。」といはむずる一言を待たせ給ひける御心の中、推し
量るもなほ淺かるべし。

さるほどに兵、佛殿に亂れ入りて、佛壇の下、天井の上までも残る
所なく搜しけるが、餘りに索めかねて、これ體のものこそ怪しけれ。
あの大般若の櫃をあけて見よ。」とて、蓋したる櫃二つを開いて御
經を取出し、底を翻して見けれどもおはせず。「蓋あきたる櫃は見
る迄もなし。」とて、兵皆寺中を出で去りぬ。宮は不思議の御命を
つがせ給ひ、夢に道行く心ちして、なほ櫃の中におはしけるが、若し

また兵の立歸り委しく搜すこともやあらむざらむと御思案あり
て、やがて前に兵の搜し見たりつる櫃に入りかはらせ給ひてぞお
はしける。

案の如く、兵どもまた佛殿に立歸り、前に蓋のあきたるを見ざり
つるがおぼつかなし。」とて、御經を皆うち移して見けるが、からか
らと打笑ひて、大般若の櫃の中をよくく、搜したれば、大塔の宮は
いらせ給はで、大唐の玄奘三藏こそおはしけれ。」と戯れければ、兵
皆一同に笑ひて、門外へぞ出でにける。これ偏に摩利支天の冥應、
または十六善神の擁護による命なりと信心肝に銘じ、感涙御袖を
潤せり。

かくては南都邊の御隠所もかなひ難ければ、則ち般若寺を御出
であつて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御供の衆には光林坊
玄尊、赤松律師、則祐、木寺相模、岡本三河坊、武藏坊、村上彦四郎、片岡八

玄奘三藏 支那唐代の高僧、印度に入り大部の經文を持ち、又それを漢譯した(西紀三〇一—三二四)。摩利支天 菩薩の名。十六善神 大般若經の守護神。熊野 紀伊國(和歌山縣)牟婁郡をひらく熊野といふ。赤松律師 則村の第三子。延暦寺の律師。初め、護良親王に從ひ、後、尊氏の謀叛に與した。村上彦四郎 義光、信濃國(長野縣)の人。元弘三年(一一五三)吉野城の陥らうとする時、大塔の身代になつた。

柿の衣
頭巾

郎矢田彦七平賀三郎彼此以上九人なり。宮をはじめ奉りて、御供のものまでも、皆柿の衣に笈を掛け、頭巾とさん半ばにせめ、その中に年長ぜるを先達マサダテに作り立て、田舎山伏の熊野参詣する體にぞ見せたりける。

二

華軒香車

この君もとより龍樓鳳闕リウロウホウケツの内に人とならせ給ひて、華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は定めてかなはせ給はじと、御供の人々かねては心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる踏皮たび脚巾草鞋を召して、少しもくたびれたる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤おこたらせ給はざりければ、路次に行き逢ひける道者も、勤修ごんじゆを積める先達も、見咎むることなかりけり。

先達

由良の湊
紀伊國(和歌山縣)日高郡にも在るが、こゝは淡路國(兵庫縣)津名郡、和歌山對岸の港。
藤代
紀伊國(和歌山縣)海草郡。
和歌
紀伊國(和歌山縣)海草郡和歌の浦。
吹上・玉津島
共に同所附近。
切目の王子
高郡に在る。日

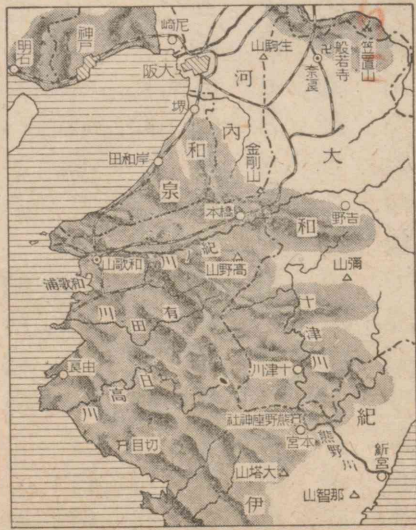


びんづら

由良の湊を見わたせば、沖漕ぐ舟の楫を絶え、浦の濱ゆふいく重とも、知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀伊路の遠山渺々と、薄紫や藤代の松にかゝれる磯の浪、和歌吹上をよそに見て、月に磨ける玉津島、光も今はさらでだに、長汀曲浦の旅の路、心を碎くならひなるに、雨を含める孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、哀れをもよほす時しもあれ、切目の王子に着き給ふ。

その夜は叢祠の露に御袖を片敷きて、夜もすがら祈り申させ給ひけり。

丹誠無二の御勤、感應などかあらざらむと、神慮も暗に測られたり。夜もすがらの禮拜に、御窮屈ありければ、御肱を曲げて枕として、暫く御まどろみありける御夢に、びんづら結ひたる童子



熊野三山 紀伊國(和歌山縣)東牟婁郡三山は本宮・新宮・那智
十津川 大和國(奈良縣)吉野郡 熊野川の上流
兩所權現 本宮と新宮



大 塔 宮 (筆秋長田磯)

一人来て、熊野三山の間はなほも人の心不和にして大義成りがたし。これより十津川の方へ御わたり候ひて、時の到らむを御待ち候へかし。兩所權現より案内者に附けまゐらせられて候へば、御道指南仕るべく候。」と申すと御覽ぜられて、御夢は即ち覺めにけり。これ權現の御告なりけりと、たのもしく思召されければ、未明に御よるこびの奉幣をさゝげ、やがて十津川をたづねてぞ分け入らせ給ひける。

その道のほど三十餘里が間には、絶えて人里もなかりければ、或は高峯の雲に

空翠

枕をそばだて、苔の筵に袖を敷き、或は岩漏る水に渴を忍びて、朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨なうして、空翠常に衣を濕す。見上ぐれば、萬仞の青壁劍に削り、見おるせば、千丈の碧潭藍に染めり。數日の間かゝる嶮難を経させ給へば、御身もくたびれはてて流るゝ汗、水の如く、御足は缺け損じて草鞋皆血に染れり。御供の人々もその身鐵石にあらざれば、皆饑ゑ疲れてはかぐしくも歩み得ざりけれども、御腰を推し、御手を挽いて、路のほど十三日に、十津川にぞ着かせ給ひける。

朝比奈知泉
評論家。水戸の
人。文久三年(一
八五三)生。

賴山陽

名は襄。儒者。安
藝國(廣島縣)の
人。天保三年
(一八三二)歿。年五
十九。

老博士

柴野柴山。名は
邦彦。儒者。文
化四年(一八六
七)歿。年七十四

政記

日本政記。十六
卷。神武天皇よ
り後陽成天皇よ
り至る百七代二千
二百五十餘年間
の編年史。

五 賴 山 陽

歴史ノウラ

朝比奈知泉

「詩は別才なり。」といひ、詩人は生る、成るにあらざ。といふは、東
西一般の金言なり。今、山陽賴氏の一生を考ふるに、その性格とい
ひ、その言行といひ、その著作といひ、一として詩ならざるなし。そ
の童歳に當り、夙成を以て老博士を驚かしたるは詩なり。その父
母を懷ふに厚く、その王室を懷ふに厚く、その忠臣義士を懷ふに厚
く、天下國家を懷ふに厚く、情の熱するところ常に理の冷やかなる
に勝ちたるは詩なり。その北馬南船、行李卸さざるところなく、春
花秋月、遊展遍からざるところなきは詩なり。その吟域を撤して
諸生を待ち、禮貌を外にして王侯に接するは詩なり。山陽の性格
言行、誰かこれを詩にあらざといはん。
試にその著作の史篇を視よ。政記の一書は固より多とするに

外史

日本外史。二十
二卷。源平二氏
より徳川氏に至
る武家の歴史を
書いたもの。

月のそよ吹く
さよ
かへかへつるが
くまひまよ
しなやなるる
ナニ



賴 山 陽

足らず。外史何の取る所ぞ。その議論は平凡のみ、その事實は誤
謬のみ、その體裁は偏失のみ。然れどもその筆墨の靈妙活動、殆ど
天馬空を行く趣あり。敘事或は精、或は疎、或は長、或は短。精にし
て長なるときは、微として穿たざるな
く、細として及ばざるなし。疎にして
短なるときは、或は脈々の餘情を含み
或は翹々の餘韻を存す。戦争を敘す
れば讀者をして汗を握らしめ、別離を
敘すれば讀者をして涙に咽ばしむ。
而してその敘論のごとき、俯仰低回、感
慨淋漓、まことに讀者をして一唱三歎せしむるものあり。
此等の文字、此等の思想、果して如何なる天才より流出したるも
のぞ。その題目を擇ぶに源平以後の戦記を採りたるがごとき、そ

の事實に於ては博引旁搜と明證確説とを主として、なほ讀者を了悟せしむるを務めず、専らその文章の靈動して讀者をして感激せしめんとしたるがごとき、特に王室と忠臣とを思ふ情の切なるより正記を立つる標準一定ならずして、その體裁に前後の矛盾を來せるを顧みざりしがごとき、半生の精力を費して編述したる二十卷の外史は、看來れば一篇無韻の敘事詩たるのみ。

試にその論策文章を視よ。民政といひ、市糶といひ、水利といひ、邊防といひ、迂疎空闊にして實用に施すべからざるもの比々として皆これなれども、その熱情の溢れたる、その文勢の壯なる、頗る少年の大聲放語するに似たるものあり。而して外史以前の文章に就きてその精華を求むるに、その寸鐵人を殺すの妙、多くは小品の文字にあり。その形體は即ち論策たり、文章たり、その本質は即ち想像のみ、詩詞のみ。

去りてその詩を見よ。雄健なるものあり、典雅なるものあり、適麗なるものあり、輕妙なるものあり。而してその最長を見るは歌行にあり、樂府にあり、料を史傳に取りてこれを詩詞に寓したるものあり。山陽亦自ら以て得意とし、余詠物を欲せず。詠物は詠史に若かず。史中無數の好題目あり。讀むに隨ひて淺深皆眞詩を成すべし。これを舍てて雁字鶯梭を曰ふは爲す無きなり。とはその平常の持論なりき。亦以てその才の日本の文學を振ふに足りしを見るべきなり。余嘗てその戲に作れる今様を讀み、その跌宕飄逸自ら不群の趣あるに服し、思へらく、この詩才に加ふるに彼の史傳の嗜好あり。もし馳驟縱橫、奇想を天外に飛ばし、その事實に拘泥することなく、演義述作する所あらしめば、その造詣何ぞ唯李北地嚴海珊にして止まんや。と。わが史傳は未だ多く題詠に入らず。潛心好案を求め、研精妙句を探り、その外史に灑ぎたる

李北地
名は夢陽、明の
詩人。
嚴海珊
清の詩人。

心血を傾倒してこれを詩賦に注がんか、儼然たる敘事詩を作りてわが文學世界を風靡せんこと難からざりしならん。惜しいかな、漢土の詩に僻して固有の天才を萎縮し、經濟の學に志を奪はれて専ら功力を詩に用ひざりしこと。余が山陽の専ら詩人とならざりしを惜しむ理由頗る多し。今少しくこれを擧げんか。詩は別才なり。而して詩才敏妙、その天稟に出づ。これ一なり。詩人は別料を取るに自ら新機軸を求むべし。而して史傳を以て料とすることその卓識に發す。これ二なり。詩人は愛情の熱肺腸なかるべからず。而して尊王の誠と忠臣義士を思ふ情とは、面に盎れて背に洩し。これ三なり。而して余が特に表彰せざるべからざる第四の理由あり。

余曾て「山陽先生行狀」を讀み、その常に曰く、「我を才子なりといふは未だ我を悉さざる者なり。我を能く刻苦すといふ者は、眞に我

山陽先生行狀
山陽の門人江木
鰐水の著

古賀穀堂
名は燕、佐賀藩
の儒者、天保七
年(西元)歿、年
五十九。

を知れり。」といふに至り、竊にその實を失へるに非ざるかを訝りしが、後その詩稿を観るに及び、苦心經營一句も苟もせざりし實迹を審にし、且古賀穀堂を訪ひ、初その千言立成の敏才に驚きしが、數月を隔てて再び訪ひし時、その文稿の依然として改削する所なかりしを見て、茲に與し易しとの念を起したりといふ逸事を聞き、その意匠慘澹、勉勵刻苦の勞を厭はざる忍耐あるを明認し、坐に景慕の情を催したり。蓋し創意の才は必ず刻苦の力と相待ちて後始めて絢爛の華彩を發すべし。余が山陽を惜しむ第四の理由とするは、即ち斯の經營刻苦の氣力のみ。

余曾て山陽先生行狀を讀み、その常に曰く、我を才子なりといふは未だ我を悉さざる者なり。我を能く刻苦すといふ者は、眞に我

頼山陽筆蹟

又山陽が當時の儒者の如くに經義に耽り章句訓詁の末を爭ふ

風なかりしは、頼るその才の發達に便なりしなるべしと雖も、かの
 經濟實用を以て學問の唯一本旨なりと考ふるに至りては、山陽亦
 その常套を襲ふを免れず。つらく、山陽の才幹を窺ふに、政治吏
 務はその長ずる所にあらざりしが如し。即ち早く自ら計をなし、
 區々たる論策を作るを輟め、大いに詩に奮はば、その成功何ぞ營に
 今日の名聲に止らんや。人或は謂はん、山陽は外史を著して一世
 を鼓舞し、大いに尊王の精神を喚起して、遂に維新中興の遠因をな
 せり。若し外史を作らざる一詩人にて止まんか、何ぞこの大功を
 奏するを得ん。と。嗚呼、これ詩を知らざる者の言のみ。詩の人
 心を感じ發するは、その勢力遙に散文に過ぐ。外史果して能く維新
 中興の遠因をなせりといはば、外史中の事實を敷衍してこれを詩
 にせるもの、亦豈その遠因となる能はざらんや。且外史の如きは、
 その文章如何に靈妙なりとも、今日の史學よりこれを視れば、小説

春 水
 頼惟完。安藝藩
 の儒者。文化十
 三年（四七〇）歿、
 年七十一。

と實録との間に横たはる一種の不可思議物たり。史の名目を以
 てしては、決して完璧なりといふ能はず、上乘なりといふ能はず。
 焉ぞ初より純然たる詩篇を作るの勝れるに若かんや。柴野博士
 は山陽童時の詩を見て大いに嘆賞し、實材たらしむべし、詞人たら
 しむべからず。とて、山陽の父春水に勸めて史を學ばしめたりと
 いへり。博士の見、亦時流を脱せずといへども、その史を學ばしめ
 たるは大いに可なり、その遂に修史の業に志すに至らしめたるは、
 余輩が山陽のために再四歎惜する所なり。

（今世名家文鈔）

上田秋成
 國學者。大阪の
 人。文化六年(三
 一八〇九)歿。年七十
 八。
 文治
 後鳥羽天皇の御
 代(八四一—八四七)。
 鎌倉の大將
 源頼朝。

六月の前

上田秋成

文治某の年の秋、八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴が岡の宮居に詣でさせ給ふ。例の事にて、御供つかまつる人々、御前追ひ、御あとべつからまつれる、渚に遊ぶ蘆鶴の歩みして、疾からず、遅からず、列を亂さず練り出でさせ給へるを、大路に膝折り伏せ、畏みたいまつる人数多あるに、けいめいして「あなとだにいはせず、世に嚴めしく貴き御有様なり。」

返り申しして御手輿に召させ給ふ程、さとき御まなじりに見とどめさせ給ひ、御階の忌垣の許に畏まりをる法師のあるが、見上げ奉る面つき、旅に飢ゑていとやせ、黒みづきたるに、衣杖笠なども乞食もの、の様したるが、めをぬすみてうずすまりをる、直人ならずと思しけむ、あの法師の修行するやう、名をも問へ。」と仰せたらうぶ。

圓位

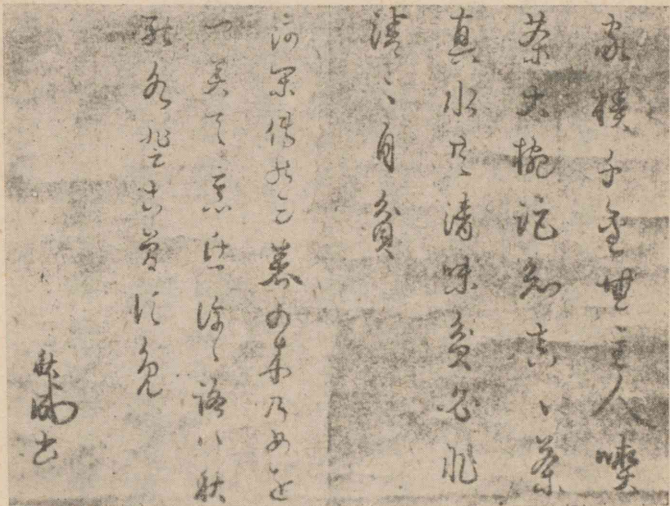
西行の僧名。
 穴熊の云々
 「西伯將、獵、ト、レ、之、曰、非、龍、非、影、非、熊、非、非、非、熊、非、非、非、虎、所、獲、霸王、之、輔、果、遇、呂、尙、於、渭、水、之、陽。」
 おほとなぶら
 (史記)
 簀子
 藐姑射の山
 仙洞御所の意。
 八百日ゆく云々
 「八百日ゆく濱の
 眞砂をしきかへ
 て玉になしつる
 秋の夜の月。」
 (千載集)

御輿添の若侍いそぎ走りよりて、ありがたく御目たまへり。何處よりの修行ぞ、名をも申せよ。」といふ。ゆくりなきに驚きたる様して、雲水に在家定めず侍る者にて、名は圓位と申す。」といふ。聞しめされて、さればこそ聞き知りたれ、穴熊の猛き獲物の類ならで、賢き人得たる例に誘ひ歸らむ。吾が後につきて來れといへ。」とて、召し連れさせ給へり。

御館に入らせ、御装束改めさせ給へば、やがておほとなぶらあまた照しかゝげたり。「けふの道行づとゐてこ。」と仰せたらうぶ。「法師まゐれ。」とて、おまし近き處の一間なる處の簀子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて、昔、藐姑射の山の御宮仕せし人の、世をはかなきものに思ししみて、身は黒くやつしたれど、月花のなげきの譽は、物の心なき東人さへ聞き知りたるぞ。八百日ゆく濱の眞砂の中には玉とて拾ひ收めたらむを、かたりて聞ゆべく仰せたらうぶ。

大樹

いみじくかしこまりて、思ひかけず大樹の御蔭に参り侍れば、い



伊勢の海云々
「伊勢の海の千尋の濱に拾ふとも今は何てふかひがあるべき。」
(後撰集)
かひあること

上田秋成筆蹟

ち給ふ御うつは物の大いなるに、思しよらせ給ふには、かけても及

ぶまじきをさへ思し知り侍る。大空に羽うちつけて飛ぶたづの聲、霜枯の淺茅がもとの蟲の音、いかで取りなめて聞ゆべき。あなかしこし。」と申す。

うちゑまさせ給ひ、弓取りし人のもとの心の猛きには、よむ歌も直くあからさまと聞くはまことか。歌は武士のあら／＼しき心には詠みうつし得まじきものに、宮人達は沙汰し給へりとや。軍に出で立ちて、笛鼓の音、馬のいなゝきは物とも思はぬを、この三十文字あまりのまなびには心の後るゝはいかに。「こはかしこき御心にも思し惑はせ給ふものか。古の代々の帝は、馬に鞍おき、弓矢みとらして軍に立たせ給ひき、その御歌をよみ奉れば、猛く直々しく調もいと高しとこそ打聞き侍れ。いでや歌詠まむとては、ますらを心を取隠し、あてになよびかに詠みうつすべくするこそ、この道のいみじき煩なれ。君がさとくたけき御心のまゝに、うちいで

あてになよびかに

大風起り云々

「大風起兮、雲飛揚。威加海內兮。歸故郷。」

(漢、高祖)

烏鵲南に

「月明星稀、烏鵲南飛。」

(魏、曹操)

秀郷

藤原秀郷。天慶亂に平將門を平げて鎮守府將軍に任ぜられた。

給はむには、今の世の人誰かは立ちあへ奉らむ。三尺の劍を執りて、大風起り雲飛揚す。」とうたひ、槊をよこたへて、烏鵲南に」と詠ぜし君達は、鞍の上にて文に遊ばせ給ふならずや。玉造らがいみじきをすりみがき、染殿の八入の色もはかなき目うつりばかりには何にかは。されど谷深き鶯の聲、信濃路出づる荒駒の歩み、いづれの道、何の業にも始よりすぐれたらんは鬼にこそ侍らめ。」といふ。人々あれ聞き給へ。世は捨てのがれてもたのもしき人の心ならずや。汝が遠つ祖の秀郷といひしは、世にいみじき弓の上手となむ聞ゆる。傳へたる事もあるべし。かくこそとおぼししみぬることは忘れずてこそあらめ。こと一言にても教へ承るべし。「こは益、恐れある御問はせなり。御物語のはてくは、つは者の道暫しも怠らせ給はぬ御心より、野山をすみかの瘦法師にだに、物問はせ給ふことのかたじけなさよ。向ひ奉りては、をこがましく家の

士卒の疽を病めるを云々

「卒有_リ病_ヲ疽_ヲ起_ス爲_ル之_ノ吮_ム之_ヲ。」

(史記、吳起傳)

竈を滅じ云々
齊の孫臏が軍師となつて魏の國に入る、竈を作るのをへらして敵に油斷させ敵將龐涓を自滅させた話。

傳なりなどとして聞えや奉るべき。まして有難き大宮仕をいなみたいまつり、みおやだちの慈みをさへあだなるものに、年纔に二十三にして家を出でたるいたづら者の、弦ひき一つだに心に留めし事も侍らず。たゞ一言の忘れ難きは、賞を重くし罰を軽くせよ。」といひしと、任ずる者をはづかしむれば危し。」といひし事のありがたさよ。士卒の疽を病めるを吮ひしは、人の心をよく買ひなすと雖も、誠の情よりも覺え侍らず。竈を滅じて人を危きに墮し入るゝは、將帥のさかしきにて、國を治め天の下をしるべき君の御心にあらず。軍を出したまへることの、あやしきまでかしこくさせるを、餘所ながら聞き奉るには、この方の御問ゆるさせ給へ。」とて、額を板敷にすりつけて申す。

君笑み誇らせ給ひ、口とく心さとき法師なり。今宵は月見る夜ぞ。物語今ははたしてむ。人々と土器とりはやし、曉かけて遊ば

む。まれ人は酒飲まざるべし。鹿猿のなかに立交りて歌よめといふともよむまし。たゞわが前に遊べ。風冷やかなるにも飽かず



西行法師

ず飲み物きたなげに食ひちらす人は暖かにもこそ。この火取法師に参らせよ。」とて、白銀もてつくりたる猫のかたちしたるを取傳へて、「君より賜る。」とて、前に置きたり。「鹿猿は尙心たけし。鼠をだにえとらぬ瘦法師が爲には、似つかはしき御賜ぞ。」とて、三度おしいたゞきぬ。あした、御暇賜りて立ちいづるに、御館の人やどりに、誰殿のわらははべならむ、くゞり袴の裾、朝露に濡れそぼちて、いと寒げにをるを見て、これ取らせむ。火埋みて手足

煖めよ。」とて、かのきら／＼しき物を與へて、かへり見もせず立ちぬ。童うち驚き、これ見給へ。見も知らぬ法師の見も知らぬ物を賜ひつるは。」とて、青侍に見すれば、目口をはだけ、かく尊き寶物に誰かはえさせむ。盗みやしつる。」といふ。「さらに／＼道のそらにかゝるものやはあるべき。あなおそろし。殿に奉りて給へ。」といふ。

やがて御館にもてまゐり、つかふる君を呼びいでて、しか／＼のこととなむ申す。「いとあやし。大將殿の法師に賜りしを、いかで童に得させけむ。いぶかし。」とて、まづ急ぎて聞え奉る。君うちゑみ給ひ、かのゑせ法師、あなづらはしくをさなげなる物くれしとて、腹だたしくや思ひけむ、わが門の前に捨て行きつるよ。法師とても男魂なくば修行もえせぬなるべし。されど家を出でて猶身を守り、才に誇りて野山にまじり、歌詠みてのみあるは、世捨人の捨

てらるべきあさましさをぞかし。一度けがれし物、その童に取らせよ。」とて、とりおろさせ給ひぬ。

西行、後にこの事を人に語りていふ、右府は誠にねぢけたる君なり。口に蜜し給へど、心には針のおはするぞ。漢高の大度、曹孟徳の智略あるに似て、天下の人皆この君の網の中に入れられたるは、佛の冥福といふものを生れ得させけむ。唯悲しむべきは、神の御裔すゑ、この後やうく衰へさせ給はむ世の姿なるは。」とて、涙止め難くして物語りしとなむ。心なき身にも之を聞き傳へては、秋の夕暮ならずもうちひそみぬべし。

(藤妻册子)

漢高
支那漢の高祖。
曹孟徳
支那魏の曹操。

心なき身云々
「心なき身にもあはれは知られけり鴨立つ澤の秋の夕暮」。
(西行)

藤岡作太郎

號は東圃。文學博士。國文學者。金澤市の人。明治四十三年歿、年四十一。

宗祇

足利時代の連歌の名人。文龜二年(三三〇)歿、年八十二。

鴨・桂

共に京都府を南に貫き下流は合して淀川となり、大阪灣に注ぐ。

七 歌人 西行

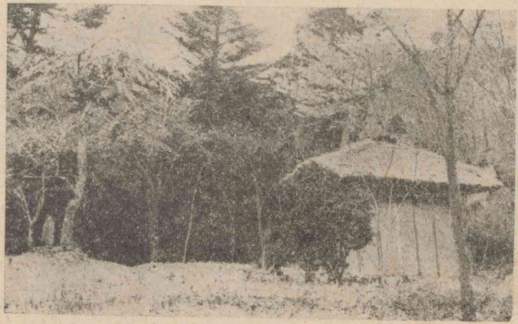
藤岡作太郎

わが國、古來詩人多しといへども、深く自然にあこがれ山川を無二の友として、生涯の過半を旅行の中に終へしもの、前後僅に三人、西行宗祇芭蕉これなり。

西行これが先達をなし、宗祇は應仁亂離の折をも厭はず、西行に私淑してその跡を追ひしもの、芭蕉は元祿泰平の機に乗じて、また西行宗祇が行狀を慕ひしものとす。西行は歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人、各その道に一期を劃せし三家が、いづれもまた風月に放浪し、雲水に吟嘯せしことを思へば、旅行がいかに詩人の吟囊を肥すものなるかを知らるべし。そもく、平安朝の貴紳淑女は、鴨桂二川の流域數里の間を己が

脚踏

世界とし、海も見ぬ天地に脚踏して足畿外に出でず、一生の経過極めて単調に、感情を刺衝するものなかりければ、従うて思想の發展



(野吉)庵行西

もある事なし。見聞するところは東山の花、西山の紅葉、いつも同じ京洛の風物より外は知らざれば、詠ずるところの和歌も變化を見ず。子は父に継ぎ、孫は祖を承けた、同じ詞花、言葉飾るのみにて、累代繼承しゆけば、和歌の思想、辭句の上にも、おのづから典型を生じて天真を忘る。實情を欺き、虚偽に流れ、浮華輕薄、徒らに形式を飾りて、燦爛たる錦囊その内容は空しく、滔々として風を成せる時、西行ひとり蹶起して從來踏襲の典型を簸却し、みづから山水の間に逍遙して、直接に自然が

簸却

典型

親昵

隱微の聲を聞き、感得するところは、萬葉の花と咲けり。平安朝の末、崇徳天皇の御製が殊に斷腸の響あるは、その悲惨なる實境を詠ぜる事の、世上一般の題詠と選を異にすればなり。わけて西行が歌ふところ、一も古人の粉本を模倣せず、一字一句みな己が肺腑より出づ。數百年の後、なほ名聲赫々として、天成の大才と許さるゝもまた宜ならずや。西行既に古來の典型を捨てて、たゞちに自然の堂奥に到らんとす。深く山川草木を愛して、これを視ること猶己を視るが如く、親昵して同情の念に堪へざるは固より然るべきことなり。

わきて見む老木は花もあはれなり
いまいくたびか春にあふべき
こゝにまた我が住みうくてうかれなば
松はひとりにならむとすらむ

同情は進んで愛着となりぬ。西行は官祿を捨てたり、妻子を捨てたり、すべて世間を捨てたり。されどゆかしき花よ月よ。

おのづから花なき年の春もあらば

何につけてか日を送らまし

うちつけにまた來む秋の今宵まで

月ゆゑをしくなる命かな

愛着は迷ひなり。この雲を去らざれば真如の月は明らかなり難しと雖も、山水もと無心にして、人間の如き魔性を有せず。これを窓前日夜の友とす。清淡虚無、一心もまた物によつて動かされざること山の如く、機に従うて轉ずること水の如し。來往自在、ここに疑懼の境を去つて安心は漸く決定すべし。

今更に春を忘るゝ花もあらじ

安く待ちつゝ今日もくらさむ

真如の月

斧鑿の痕

天籟

雲にたゞ今宵の月をまかせてむ

厭ふとしてしもはれぬものゆゑ

西行の歌は企てて成すものにあらざして、自ら成れるなり。そのいかに自然にして平易に、斧鑿の痕を存せざるかを見よ。

ながむるに慰むことはなけれども

月を友にてあかす頃かな

今よりは昔がたりは心せむ

怪しきまでに袖しをれけり

要するに西行は生れながらの歌よみにして、歌を作るものにあらず。天籟ふき來つて松濤即ち鳴る。その聲必ず自然を離れず、平易率直を旨とすれども、風凄しければ鳴ることも亦強し。時に婉曲の響あれども、故らに人為の巧を加へねば、天成の詩美は千歳の下愈、光を増して、後人をして渴仰止まざらしむ。(國文學全史)

八古今調と新古今調

古今集より

さくら花咲きにけらしも足曳の山の峽より見ゆるし
らくも

紀貫之

僧正遍昭

はちす葉のにごりにしまぬ心もて何かは露を玉とあ
ざむく

紀友則

夜やくらき道やまどへる郭公わがやどをしも過ぎが
てになく

大江千里

大江千里
平安朝の歌人。

紀友則
古今集撰者の一人。

僧正遍昭
俗名は良崇宗
貞。六歌仙の一人。
寛平二年(一
五〇)歿。年七十
五。

古今集
正しくは古今和
歌集。二十卷。
醍醐天皇の勅に
より紀貫之等延
喜五年(一〇五五)に
撰んだ歌集。

凡河内躬恒
古今集撰者の一人。

清原深養父
平安朝の歌人。

新古今集
正しくは新古今
和歌集。二十卷。
後鳥羽天皇の院
宣によつて撰集
せられたもの。

藤原定家
新古今集撰者の
一人。新勅撰集
の撰者。仁治二
年(一一六二)歿。
八十。

月見ればち々に物こそ悲しけれ我が身一つの秋には
あらねど

凡河内躬恒

立ちとまり見てを渡らむもみぢ葉は雨とふるとも水
はまさらじ

清原深養父

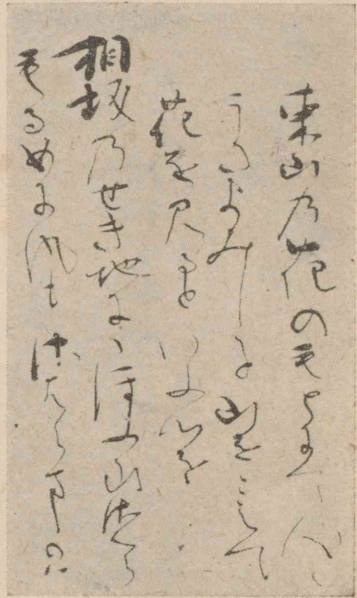
冬ながら空より花の散り来るは雲のあなたは春にや
あるらむ

新古今集より

藤原定家

大空は梅のにほひに霞みつゝ曇りもはてぬ春の夜の
月

東山の花のもと
にて人々うたよ
みしに山をこえ
て花を見るとい
ふ心を相坂のせ
きぢにほふ山
さくらもるめに
風もさはらまし
かば
(權中納言俊忠
卿集)



歌集定家筆切

藤原雅經
新古今集撰者の
一人。承久三年
(一二六二)歿、年五
十二。

藤原雅經

尋ね来て花にくらせる木の
間より待つとしもなき山
の端の月

後鳥羽上皇

みよし野のたかねの櫻ちりに
けり嵐もしろき春のあ
けほの

藤原俊成
定家の父。歌人。
千載集の撰者。
元久元年(一一六四)
歿、年九十一。

藤原俊成

駒とめてなほ水かはむ山吹
の花のつゆそふ井出のた
まみづ

西行法師

道のべに清水流るゝ柳かげ
しばしとてこそ立ちどま
りつれ

藤原良經

人すまぬ不破の關屋の板
びさし荒れにし後はたゞ
秋の風

藤原家隆

志賀の浦やとほざかりゆく
波間よりごほりて出づる
ありあけの月

藤原家隆
新古今集撰者の
一人。嘉祿三年
(一二六二)歿、年八
十。

藤原良經
鎌倉時代初期の
歌人。建久元年
(一一九〇)歿、年三
十八。

平家物語

十二卷 作者未詳。平家一門の興亡を叙した軍記物語。

忠度

清盛の弟。

混

胃

五條三位俊成卿
四七頁頭註參照

九 故郷の花

平家物語

薩摩守忠度はいづくよりか歸られたりけむ侍五騎童一人我が身ともに混胃七騎取つて返し五條三位俊成卿の許におはして見給へば門戸を閉ぢて開かず。「忠度」と名乗り給へば落人還り來れり」とて其の内騒ぎあへり。薩摩守急ぎ馬より飛んで下り自ら高らかに申されけるはこれは三位殿に申すべき事あつて忠度が參つて候。たとひ門をば開けられずとも此の際まで立寄り給へ。申すべき事の候」と申されたりければ俊成卿其の人ならば苦しかるまじ。開けて入れ申せ」とて門を開けて對面ありけり。事の體何となうものあはれなり。

薩摩守申されけるは先年申し承つてより後はゆめく疎略を存ぜずとは申しながら此の二三箇年は京都の騒ぎ國々の亂れ出

君
安徳天皇

さりぬべき

で來あまつさへ當家の身の上にまかりなつて候へば常に參り寄る事も候はず。君既に帝都を出でさせ給ひぬ。一門の運命今日はや盡き果て候。それにつき候ひては撰集の御沙汰あるべき由承つて候ひし程に生涯の面目に一首なりとも御恩を蒙らむと存じ候ひつるにかゝる世の亂れ出で來て其の沙汰なく候條唯一身の歎きと存じ候。此の後世靜まつて撰集の御沙汰候はばこれに候卷物の中にさりぬべき歌候はば一首なりとも御恩を蒙つて草の陰にても嬉しと存じ候はば遠き御守とこそなり參らせ候はむずれ」とて日ごろ詠み置かれたる歌どもの中に秀歌と覺しきを百餘首書き集められたりける卷物を今はとてうち立たれける時これを取つて持たれたりけるを鑑の引合より取出でて俊成卿に奉らる。

三位これを開いて見給ひてかゝる忘れ形見どもを賜り候上は

使節
瀬海周之徳

大江朝綱

前途程遠し云々

「前途程遠、馳思

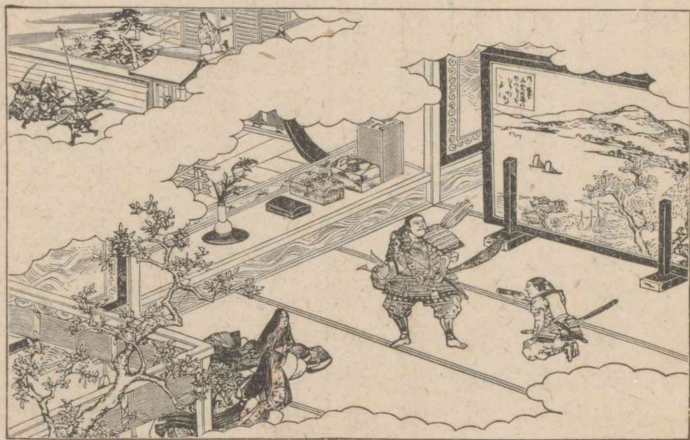
於雁山之暮雲、

後會期遙、雲縷

於鴻臚之曉淚。」

(和漢朗詠集)

藤原公任撰



(繪圖史歷本日) 忠度俊成を訪ふ

ゆめく、疎略を存ずまじう候。さ
ても只今の御渡りこそ、情も深う、あ
はれも殊に勝れて、感涙おさへ難う
こそ候へ。」と宣へば、薩摩守、骸を山
野にさらさばさらせ、うき名を西海
の波に流さば流せ、今はうき世に思
ひ置くことなし。さらば暇申す。」
とて、馬にうち乗り、冑の緒をしめて、
西をさしてぞ歩ませ給ふ。三位、後
ろを遙に見送つて立たれたれば、忠
度の聲とおぼしくて、「前途程遠し、思
ひを雁山の夕の雲に馳す。」と、高ら
かに口ずさみ給へば、俊成卿も、いと

即詠にありて、後
待初る致を撰集

千載集

藤原俊成、後白

河院の院宣によ

つて撰集した和

歌集。

どあはれに覺えて、涙をおさへて入り給ひぬ。

其の後、世静まつて千載集を撰せられけるに、忠度のありしあり

さま、云ひ置きし言の葉、今更思ひ出でてあはれなりけり。件の巻

物の中に、さりぬべき歌いくらもありけれども、其の身勅勤の人な

れば、名字をばあらはされず、故郷ノ花。」と云ふ題にて、詠まれたり

ける歌一首ぞ、讀人知らず。」と入れられたる。

さなみや志賀の都は荒れにしを

昔ながらのやまざくらかな

其の身朝敵となりぬる上は、仔細に及ばずと云ひながら、恨めし

かりし事どもなり。

高山樗牛
名は林次郎。文學博士。文藝評論家。山形縣の人。明治三十五年歿。年三十二。

一〇 平家の末路

高山 樗牛

一 清盛入道

世にも哀れなるは平家とぞいふめる。げに此の一門の盛衰を考ふれば、心も詞もなかく、に及ばざりけり。案ずれば、一旦の榮華に耽りて、百年の計を思はず、秋の風の吹き荒ばんずる朝も、猶春の夜の夢臚にして、覺めての後は流石にうき世と觀じて、先世後代既に梭をかへたるを如何にすべき。今を昔に反さんすべもかた絲の、よりくづれたる世こそ返すくも是非なけれ。

されば、風雅にかくれては、一題の遺詠に今生の本懐を終へ、恩愛にほだされては、己が身の現在に來世の果報を思はず。哀れは桐の一葉に散り初めて、世はとこしへの秋とぞ見えにける。思へば奇しきまでに哀れなりける運命かな。

一題の遺詠に云

九課参照

恩愛にほだされ

ては云々
維盛が都に留めた妻子を眷戀した事をさす

相國

清盛をさす

殿上の交云々

八幡

京都男山の石清水八幡宮

賀茂

上下の二社が在る。賀茂別當命。玉依姫を祀る。上社は京都市上京區上賀茂、下社は上京區賀茂。糺の森に在る。官幣大社。

嚴島

官幣中社。廣島縣佐伯郡嚴島町に在る。市杵島姫を主神とす

法皇

後白河法皇

さるにても相國一代の浮沈こそなかく、に言葉も及ばね。弓矢のいさをし早畢んぬ。朝家の權柄今はた盛んなり。一門殿上に昇りて六十餘人、私封全國に互りて三十餘州攝籙の家は名のみにて、四海の成敗皆こゝに集れり。昔は殿上の交をだに嫌はれし人、今は、此の人ならでは人にあらじ。」と唱へられ、三百の禿童は路に往反すれども、京師の長吏これがために目を翫つるばかりなり。されば、十善の帝王畏くも外戚の威におされたまひて、八幡賀茂の御幸は、八重の潮路の嚴島とぞ觸れられける。なにがしの卿が、入る日をも招きかへさんずる勢。」と書かれしも、げにことわりとぞ覺ゆる。

不敵なる入道は、私門の榮に飽きたらで、世に人もなげに振舞はれけるこそゆゝしけれ。茲に卿相雲客、流離の難に遇ふもの四十餘人。法皇の御身を以てすら、城南の離宮に射山の嵐を偲ばせ給

ハコノヤマ
射山
重代重代の帝座
治承四年(八四〇)
福原遷都をさ
す
愛宕の里愛宕の里云々
「百年を四かへり
までにすぎ來に
し愛宕の里の荒
れやてなむ」
(平家物語)
維盛
重盛の長子
容儀帶佩

ひぬ。中にも、重代の帝座俄に動きて、愛宕の里の哀れをとゞめけるこそ、なかくにあさましかりしか。
咲きも残らず、散りも初めぬ櫻花嵐なくともかくてやはやむべき。一朝東關急を傳へて、大將軍權亮少將維盛、赤地の錦の直垂に萌黄句の鎧着て、連錢蘆毛の馬に金覆輪の鞍置かせたる容儀帶佩こそ、あつばれ平門隨一の貴公子と見えしかど、富士川の水禽に算を亂しし十萬餘騎は、徒らに永き世の笑をとゞめたるに過ぎず。
加ふるに、北土俄に雲亂れて、木曾の山氣漸く都に逼り、兩山の衆徒亦既に反覆の色を示しぬ。平家の運命日に益急なり。
時しも入道は病に罹りぬ。あはれ病の床の寂しきに、霜夜の鐘の響の闇の底に沈む時、安藝守の昔より太政入道の今に至るまで、三十餘年の過去を靜に憶ひ出でたる時、而して命の際の身ぞと觀じたる時、かれ果して如何の感慨をか催しけん。一代の榮華身に

保平のいさをし
保元・平治二亂の戦功。

小松の内府
重盛。

六 愆
六根の愆情。

餘りて、保平のいさをし又言ふに足らずと思はざりしか。己につらかりし人々を、かくまでに惱まししことの罪深かりきとは思はざりしか。幾度か帝座を驚かし奉りしは、ては軍兵を擁して法皇を幽閉しまゐらせしことの中にも、非道の所行なりしを思はざりしか。更に小松の内府が身命にかへて乃父の罪業を救はんとせし至孝の情に想ひ到りて、恩愛の絆にうたゝ悔恨の心をうごかすこと無かりしか。佛門に歸依して入道と呼びなせる身の、今や六愆煩惱の絆を離れんずる大事の際に、今生の名利を棄てて、未來の淨樂を欣求する一念を發する事無かりしか。皆あらず。入道は死に至るまで、其の初念を翻す事なく、正に其の生けるが如くにして死せしなり。
今はこの詞にいはく、兵衛佐頼朝が首を見ざりつるこそ返すくも遺憾なれ。われ死したりとて、佛事孝養をもすべからず。堂塔

をも建つべからず。急ぎ討手を下し、彼が首を刎ねて我が墓前に懸けよ。これぞ今生後世の孝養にてはあらんずるぞ。」と。一念の執着に必衰の運命をもものともせず、三世の因果を身にひくともなほ怨敵に報いんことを必せり。其の事の可否はしばらく措き、とまれかくまれ、丈夫たる心の強きは感ずべきなり。たとひ四海の波を翻して其の頭にそゞぐとも、彼に於てはなほ此の一我を如何にともすること能はざりしなり。六尺の眇軀、こゝに至れば天地の大にも比ぶべく、運命の如きは、蓋し浮塵にひとしからん。入道こそ、いはゆる死して而して生けるものといふべきか。

二都 落

凡そ世の中に傳へ遺されし歴史は多かれど、平家の都落ばかり、あはれにもまた目覺ましきは無かるべし。

南都の餘燼

治承四年(八四〇)十二月、平重衡が奈良東大寺・興福寺を焼いた。

墨股の勝鬨

養和元年(八四一)三月、重衡等源行家を尾張國墨股に討つて大いにこれを破つた。

信越俄に

養和元年(八四一)平氏、屢養仲に破られた。

比叡の云々

壽永二年(八五三)七月、養仲延暦寺に據つた。

み吉野の云々

「み吉野の山のあなただに宿もがな身のうき時のかくれ家にせむ。」(讀人知らず、古今集)

西國

壽永二年(八五三)七月、平氏、養仲を避けて、西海に走つた。

南都の餘燼未だ冷めず、墨股の勝鬨尙響きぬるに、信越俄に雲亂れて、木曾の五萬騎はや比叡のあなたに充ち満ちぬ。宇治淀の備もろくも潰えて、都も今を限りとぞ見えし。あはれ、一門の天下身を置くに處なし。世はかく憂きみに、み吉野の山のあなたに隱家は無きか。いざさらば已みなん。都の中にていかにもならんよりは、西國のみゆきに御供して、一旦の凌辱を忍ばまし。生死も知らぬ別路に、人のあはれの限りもなう、復かへり來べき都としも思はねばにや、六波羅池殿西八條以下一門譜第の邸宅宿房、京白川の四五萬家を合せて、一炬の煙となし果てぬこそ周章しかりしか。こゝに鳳闕の礎空しく残り、椒房の嵐夜々悲しむ。保元此の方、天下の榮華をつくしたる花の都の故郷を、焼野の原と顧みて、末は煙の浪路をば、行方も知らずさすらふらん。直衣束帶の身にも今は黒金の衣を着けたれども、誰かは詠歌の餘哀になれて、弓矢の響

池殿 清盛の弟、頼盛の邸であつた。西八條 清盛の邸であつた。故郷云々 「ふるさとを焼野が原とかへりみて末も煙の浪路をぞ行く。」 (平經盛、平家物語)

を勵むべき。さてもすて難き命や。今こそは憂世なれ。流石にしのばるゝ昔の様の夢に入るをば如何にせん。翠華揺々として西に向へば、秋風^{アキカゼ}到る處の野に満てり。嗚呼、昨日は東關のもとに轡を並べて十萬餘騎、今日は西海の波に纜を解きて七千餘人。行手の空はわかねども、身にしむ秋は欺かれず。渚に寄する波の音、袂に宿る月の影、いづれか心を傷ましめざるべき。月の出づる山の端を、あなた^{アナタ}の空とやおぼしけん、日暮舷に笛吹く人あり。響は遠く煙波を掠めて、三軍齊しく耳を欵つ。嗚呼、此の時、此の人、想果して如何。

(梅牛全集)

石原正明 尾張國(愛知縣)の人。文政四年(一八二二)歿、年六十二。

二年々隨筆抄

石原正明

一月

唐人の云々 菅の庾亮が武昌揚子江のほとりの南樓にて、友と月を賞した故事。

月は水のほとり殊によるし。いと大きな川の、のどやかに流るゝあなた^{アナタ}の岸にまどゐして、打笑ひなどしたる、唐人の登りけむ南の樓思ひ出でられて、誰ならむとゆかしきに、千里に明らかなりと詠ずるにやあらむ、ほのく、聞ゆるいとをかし。

二 ゆふべやまさりたらむ

ゆふべやまさりたらむ。村雨なごりなく晴れ、風いと涼しうて山の端の雲いと白うわざとならずところく、に懸れるに、いさよふ月の今出づべきにやあらむにほひうつりて見ゆる。あしたやまさりたらむ。峯の松原濃きみどりなるに茜の色燃ゆるやうにて日のなからばかりさし出でたる。

三 菊

おきまどはせる
云々
「心あてに折らば
や折らむ初霜の
おきまどはせる
白菊の花」
(凡河内躬恒、
古今集)

何がし
服部嵐雪

唐國にては菊は黄なるを愛づめり。詩どもにも黄菊黄花などぞ聞ゆる。皇國にはおきまどはせると霜によそへしより始めて、白きをむねと言ひならはしたり。實に手を盡したる種々の色より、白菊・黄菊のいたく大きならず、小さくもあらぬを、わざとつくろひなどもせで咲かせたる、この園の中など、そこの松蔭に匂ひみちたるこそをかしけれ。そが菊とは黄菊のことなりといふ、さる事にや。何がしとかや聞えし連歌師の句に、
黄菊白菊その外の名はなくもがな
さる事なり。

四 紅 葉

ゆほびか

長月つごもり神無月ついたち山ふところの少しゆほびかなる邊を行くこそおもしろけれ。紅葉くれなるなる、黄なる、濃き、淡き、

二 藍
赤藍と青藍の間
色。

ぬるで
白膠木。漆科の
小喬木。

匂ある、匂なき、おのがさまぐの情にて、見所多かり。また常磐木の濃き緑なるに、下葉のいひしらず染めたるなど、いとをかし。江戸の邊にては目黒・姿見のはし、さてはこの園の中。
もみぢは楓、なほ緑なるに、たゞ一しほ今ぞ染めつらむとおぼしくて、つやくと匂へる二藍の色めでたし。いと濃く、緋色に染めなしたるもをかし。今の世には、もみぢといふ名を己がものにぞしたる宿世いと尊しかし。梔はめでたけれど葉のさまうるはしうてなつかしげなし。ぬるでは品くだりにたり。柿の葉の霜より後まで散り残りたるがうるしもて塗りたらむやうに、照り光りて、たゞ二葉ばかり見ゆる、いとめづらかなり。黄なるは銀杏。

(年々隨筆)

島崎藤村

名は春樹。詩人。小説家。長野縣の人。明治五年生。

ロダン
フランスの彫刻家（西紀一八四一—一九一七）

一二 自然 然

島崎藤村

「花にも落日がある。」とはロダンの言葉であるとか。あのすぐれた彫刻家が、石膏や大理石を取扱ふことはかりでなくて、言葉の術にも長けて居たといふことは、實際不思議なくらゐるだ。

同じロダンの言葉に、

「年若かつた時には、私は自然を支配し、匡正するのは、藝術家の權能である」と信じてゐました。といふのは、まだ自然を知らない時には、自然を匡正するのは自分の天賦であると思つて、信じてゐたのですから。年をとるにつれて私はますます、熱情的に自然を愛するやうになり、また自然が正しさを持つてゐることがますます明らかに見えて來ました。自然を會得しようと思ふより他にはありません。私達が常により明らかに自然を啓き現さ

セザンヌ
佛蘭西の畫家。鋭い素描と直線的な筆觸とが特色（西紀一八五九—一九〇六）



（作ンダロ）人るへ考

うといそしむ時に、私達はますます、發見することが出来るのです。私達の眼が一度自然の無盡藏なことに開かれ、さうして自然をその眞理の中に再現しようとする他に努め求める所がないならば、私達は私達の天賦の涸渴を怖れることはありません。美はあるのです。存在するもの一切の中にあるのです。佛蘭西の旅にある間、私はロダンの製作に接する多くの機會があつた。しかし、私はあのセザンヌの繪畫に心を傾けて行つたと同じやうな親しみは持てなかつた。幾度かロダンに對する私の考へ方は變つた。そして、セザンヌの親しみ易く、ロダンの親しみ難いのは、やがて東洋人としての私達の性情を語るものであるこ

エレンケイ
スウェーデンの
女流思想家(西
紀六四一—五三〇)



人 物 (筆 ヌンザセ)

とを思つた。ロダンももう故人だ。私はエレンケイの訪問記な
どを読んで見て、ロダンといふ人の深い自然の愛を一層よく知る
ことが出来、その創作を考へて見る上
に一つの解を得たやうに思つた。「ロ
ダンにあつては姿態が思想を生むの
であつて、思想が姿態を生むのではな
い。」といつたエレンケイの評も面白
いと思つた。

いかにロダンが素朴な悦びを持ちつゞけた人であつたかは、左
の談話の一節を見ても窺ひ知られるやうに思ふ。ロダンはエレ
ンケイにむかつて、次のやうに語つて見せたといふことである。
「今日の人々は、單純な事物に心をひかれるといふことが全然ない
のです。」

(藤村讀本)

井原西鶴

小説家。俳人。
攝津國(大阪)の
人。元禄六年(一
六九一)歿、年五十
二。

水風呂

一三 鼠の文づかひ

井原 西鶴

毎年煤拂は極月十三日に定めて、旦那寺の笹竹を祝物とて月の
數十二本もらひて、煤を拂ひての跡を取り、葺屋根の押へ竹に使ひ、
枝は箒に結はせて、塵も埃も捨てぬ随分細かなる人ありける。過
ぎし年は十三日に忙しく、大晦日に煤はきて年に一度の水風呂を
焚かれしに、五月の粽のから、盆の蓮の葉まで段々に溜め置き湯の
沸くに違ひはなしとて、細かなる事に氣を附けて、世の費穿鑿人に
過ぎて利發顔する男なり。

同じ屋敷の裏に隠居建てて母親の生まれしが、此の男生れたる
母なれば、其の吝き事限りなし。塗下駄片足なるを、水風呂の下へ
焚く時、つくぐ、昔を思ひ出し、まことに此の木履は、我十八にて此
の家に嫁入せし時、雜長持に入れて來て、それから雨にも雪にも履

片附く
マニ合ハント
(甲ラダヤ)
クシマニラフコト



煤 拂

きて、齒のちびたるばかり、五十三年になりぬ。我一代は一足にて
埜を明けんと思ひしに、惜しや片足は野良犬めにくはへられ、はし
たになりて是非もなく、今日煙になす事よ。」と、四五度も繰言をい
ひて、其の後釜の内へ投げ
捨てられ、今一つ何やら物
思ひの風情して、涙をはら
はらとこぼし、世に月日の
たつは夢ぢや。明日は其
のむかはりになるが、惜し
い事をしました。」としば
し、嘆きのやみ難し。
折節、近所の醫者水風呂に入られしが、先づ以てめでたき年の暮
なれば、御嘆きをやめさせ給へ。してそれは元日に何人の御死去

清一年
むかはり

惠方棚

蔵
蔵
蔵

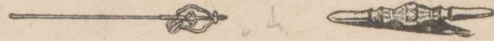
なされた。」と、尋ねられしに、いかに愚痴なればとて、人の生死をそ
れ程に嘆く事ではござらぬ。私の惜しむは、去年の元日に埜の妹
が禮に参つて年玉銀一包くれしを、何程か嬉しく、惠方棚へ上げ置
きしに、其の夜盗まれました。そもや勝手知らぬ者の取る所では
ござらぬ。其の後色々の願を諸神へ懸けますれども、其の效もな
し。又山伏に祈を頼みましたれば、此の銀七日の中に出でますれ
ば、壇の上なる御幣が動き御灯が次第に消えますが、大願の成就せ
し驗。」といひける。案の如く、祈最中に御幣動き出で、灯火微にな
りて消えける。これは神佛の事、末世ならず有難き御事と思ひ、お
初穂百二十上げて、七日待てども此の銀は出でず。さる人にかた
れば、それは盗人に追錢といふものなり。いまだき仕懸山伏とて、
様々護摩の壇に繰いたし、白紙人形に土佐踊さすなど、此の前松田
といふ放下師がしたる事なれども、皆人賢過ぎて、結句近き事には

土佐踊
土佐の盆踊の踊
方
放下師

岩座

獨鉗

錫杖



まりぬ。其の御幣の動き出づるは、立て置きたる岩座に壺ありて、
 其の中に鱒を生け置きけり。數珠さらく、と押揉んで、東方に西
 方にと獨鉗錫杖にて佛壇を荒けなく打てば鱒が是に驚き上を下
 へと騒ぎ、幣串に當れば暫く動きて、知らぬ目からは恐し。又燈明
 は、臺に砂時計を仕懸け、油を抜き取るこ
 ぞ。』と此の物語を聞くから、いよく損の
 上の損をいたした。我此の年まで錢一文
 遺さず暮せしに、今年の大晦日は、此の銀
 の見えぬ故胸算用違ひて、心がかりの正月
 をいたせば、萬づの事面白からず。』と世の外聞も構はず、大聲上げ
 て泣かれければ、家内の者ども興を覺し、我々疑はるゝ事の迷惑と、
 心に諸神に祈誓を懸けけり。
 大方、煤もはき仕舞ひて、屋根裏まで檢めける時、棟木のあひより

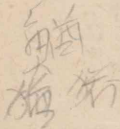


井原西鶴

杉原紙
 播磨國(兵庫縣)
 揖保郡杉原村か
 ら産する奉書の
 一種。

岡本の都
 大和國(奈良縣)
 高市郡岡村に在
 った。

かひづめ
 升落しの落ちぬ
 やうにかひ置く
 栓。



杉原紙の一包を探し出し、よく見れば、隠居の尋ねらるゝ年玉
 銀に紛れなし。「人の盗まぬ物は出ますぞ。さる程に悪い鼠め。」
 といへば、お祖母中々合點せられず、是程遠歩きする鼠を見た事な
 し。頭の黒い鼠の業、是からは油斷のならぬ事。』と、疊叩きて喚か
 れければ、醫師水風呂より上り、かゝる事には古代にも例あり。人
 皇三十六代孝徳天皇の御時、大化元年十二月晦日に、大和國岡本の
 都を難波長柄の豊崎に遷させ給へば、和州の鼠も連れて宿替しけ
 るに、それぐの世帯道具をば運ぶこそ可笑しけれ。穴をぐるめ
 し古綿、鳶に隠るゝ紙襖、猫の見附けぬ守袋、馳の道切る尖り杭、枡落
 しのかひづめ、油火を消す板切れ、鯉節引く梃子枕、其の外嫁入の時
 の熨斗、ごまめの頭、熊野参りの小米苞まで、二日路ある所をくはへ
 て運びければ、まして隠居と母屋、僅の所引くまじき事にあらず。
 と、年代記を引いて申せど、中々同心いたされず。「口賢くは仰せら
 ぬ。」

長崎水右衛門
獸に種々の藝を
仕込んで見世物
にしたので有名
な人。

るれども、目前に見ぬ事は實にならぬ。」と申されければ、何とも詮
方なく、やうく案じ出し、長崎水右衛門が仕入れたる鼠使の藤兵
衛を雇ひにつかはし、只今あの鼠が、人のいふ言を聞き入れて様々
の藝盡し。さあ、是で餅買うて来い。」と、錢一文投げ遣れば、錢を置
いて餅くはへて戻る。「何とく、我を折り給へ。」といへば、是を見
れば、鼠も包金を引くまじき物にあらず。さては疑ひ晴れました。
さりながらかゝる盗心ある鼠を宿らせたる不祥に、まん丸一年此
の銀を遊ばして置きたる利銀を、屹度母屋から濟まし給へ。」とい
ひ懸り、一割半の算用にして、十二月晦日の夜請取り、眞の正月をす
るとて、此の祖母獨寢をせられけり。

(母間胸算用)

近松門左衛門
號は巢林子。淨
瑠璃及び狂言作
者。享保九年三
月四日歿。年七十
二。

李蹈天
明朝に叛き、鍵
籠に降りし悪人。
吳三桂
明朝の忠臣。



近松門左衛門

一四千里が竹

近松門左衛門

別れ行く船路の末も不知火の筑紫は雲に埋めども、跡に擁護の
神風や、千波萬波を押切つて、時も違へず
親子の舟、唐土の地にも着きにけり。鄭
芝龍一官は、故郷へ歸る唐錦裝束引替へ
妻子に向ひ、我が本國といひ乍ら、時遷り
代變り、天下悉く李蹈天が引入れにて、韃
韃夷の奴となり、昔の朋友一族とて誰を
尋ねむ様もなく、司馬將軍吳三桂が生死
の所在も知れざれば、何を以て義兵の旗
を揚げ、何國を、一城に立籠るべき所もな
し。

天啓五年
明の熹宗の年號
(西紀一六二五)
娘
錦祥女。

甘輝
明の將軍。鞬鞞
に降り獅子城
を守る。

和藤内

一官が日本にて
まうけし子。正
史の鄭成功に當
る。

潯陽の江

江西省九江縣の
北に在る。

東坡

本名は蘇軾。東
坡は號。字は子
瞻。宋の文豪。元
宋の建中靖國元
年(西紀二〇一)
歿、年六十。

然るに某去る天啓五年、此の國を立退き日本へ渡る時、二歳にな
りし娘の子を乳母が袖に捨て置きしが、其の子が母は産み落して
當座に死す。斯くいふ父は八重の汐路の中絶えて、いつ父母も知
らぬ身が育てば育つ草木の雨露の恵みに長ずる如く、天地の父母
の助にや、成人して今五常軍甘輝といふ大名、一城の主の妻となる
由、商人の便りに聞き及ぶ。頼む方は是ばかり。親を慕ふ心あり
て娘さへ承引せば、壻の甘輝もやすくと頼まるべし。是より道
の程百八十里、打連れては人も怪しめむ。我一人道を變へ、和藤内
は母を俱し、日本の漁船の吹き流されしと、頓智を以て人家に憩ひ、
追付くべし。是より先は音に聞ゆる千里が竹とて虎の栖む大藪
あり。それを過ぐれば潯陽の江。これ猩々の棲む所。風景聳え
し高山は赤壁とて、昔東坡が配所ぞや。それよりは甘輝が在城獅
子が城へは程もなし。其の赤壁にて待揃へ、萬事を謀し合はずべ

たづき

くわを抜かず
茫然として自失
す。

し。」と、方角とても白雲の日影を心覺えにて、東西へこそ別れけれ。
教に任せ和藤内、人家を求め忍ばんと、かひなくしく母を負ひ、たづ
きも知らぬ岩巖石、古木の根ざし瀧津波、飛び越え跳ね越え、飛鳥の
如く急げども、末果てしなき大明國、人里絶えて廣々たる千里が竹
に迷ひ入る。和藤内ほうどくわを抜かし、なう母者人、此の脚骨に
覺えあり、もう四五十里も來ませうが、人にも猿にも逢ふ事か、行け
ば行く程藪の中むう合點たり。方角知らぬ日本人、唐の狐がなぶ
るよな。魅さば魅せ。宿なし旅の行着き次第、小豆の飯の相伴。」
と、根笹大竹押分け踏み分け、猶奥深く行く先に、怪しや數萬の人聲、
攻鼓攻太鼓喇叭、太平簫、高音をそらし、ひやうくとこそ聞えけれ。
「すは我々を見咎めて、敵の取巻く攻太鼓か、又は狐のなす業か。」と、
茫然たる其の折ふし、空凄しく風起り、砂を穿ち、どうくと、竹葉
颯と巻き立て、吹き折る竹は劍の如く、すさまじなんども

虎嘯けば云々
「虎嘯谷風至、龍
 舉而景雲屬。」
 (淮南子)

楊香
晉の人。十四歳
 の時父が虎にく
 はへられたのを
 救ふ。

西天
 印度



和 藤 内

愚かなり。和藤内ちつとも臆せず、讀
 めたり讀めたり。扱は異國の虎狩な。
 あの鉦太鼓は列卒の者。爰は聞ゆる
 千里が原。虎嘯けば風起る、猛獸の所
 爲と覺えたり。廿四孝の楊香は孝行
 の徳によつて自然と遁れし惡虎の難。
 其の孝行には劣るとも、忠義に勇む我
 が勇力。唐へ渡つて力始め、神力ます
 ます日本力。刃で向ふは大人氣なし、
 虎は愚か、象でも鬼でも一挫ぎ。」と、尻
 引つからげ身づくろひ母を圍うて立
 つたるは、西天の獅子王も恐れつべう
 ぞ見えてけり。案に違はず、吹く風と

共にあれたる猛虎の形、ふし根に面をすりつけすりつけ、岩稜に爪
 とぎ立て、二人を目がけ、咥みかゝるを事ともせず、弓手に擲り、馬手
 に受け、振つて懸くれば、身をかはし、撓めば、ひらりと乗移り、上にな
 り下になり、命競べ根競べ、聲を力にゑいゝゝ、虎の怒り毛、怒り
 聲、山も崩るゝ如くなり。和藤内も大童、虎も半分毛を耖られ、兩方
 ともに息疲れ、石上に突つ立てば、虎も岩間に小首を投げ、大息つい
 だる、其の響、吹輪吹くが如くなり。母藪蔭より走り出で、やあく、
 和藤内、神國に生れて神より受けし身體、髮膚、畜類に出合ひ、力立て
 して怪我するな。日本の地は離るゝとも、神は我が身に五十鈴川、
 大神宮の御祓、納受などかなからむや。」と、肌を守を渡さるれば、實
 に尤。」と、押戴き、虎に差向け、差上ぐれば、神國神祕の、其の不思議、猛
 りに猛る勢も、忽ち尾を偃せ、耳を垂れ、じりりゝと四足を縮め、恐
 れわなゝき岩洞に隠れ入る尾筒を掴んで、跳ねかへし、打伏せく、

天斑駒云々
素盞鳴尊天斑駒
を逆剝にし給ふ
話古事記にあ
り。

怯む所を乗懸り、足下にしつかと踏まへしは、天斑駒、素盞鳴尊の神力、天照神の威徳ぞ有難き。かゝる所に列卒の者群り來る其の中に、大將と思しき者大音上げ、やあく、汝奴は何國の風來人、我が高名を妨ぐる。其の虎は忝くも主君右軍將李蹈天より韃靼王へ獻上の爲狩出したる虎なるぞ。早々渡せ。異議に及ばば打殺さむ。しやぐわん、しやぐわん。」と喚きける。李蹈天と聞くよりも、願ふ所と笑つぽに入り、やあ、餓鬼も人數、しほらしい事ほざいたり。身が生國は大日本。風來とは舌長し。左程欲しがる虎ならば、主君と頼む李蹈天とやら、石花茶とやら、爰へ突き出し詫言させい。直に逢うて用もある。さもない内はいかな事ならぬ。」と睨付くる。「やあ、物ないはせそ。討取れ。」と一度に劍をはらりと抜く。「心得たり。」と守を虎の首にかけ、母の傍らに引据うれば、繋ぎし如くに働かず。「おゝ心安し。」と太刀さしかざし、群る中へ割つて入

り、八方無盡に割立てく、撫で捲くる。列卒の大將安大人、官人引具し立歸り、おのれ老耄餘さじ。」と一文字に切り懸る。猶も神明擁護の驗、神力虎に加はつて、むつくと起きて身慄ひし、敵に向ひ齒を鳴らし、猛りうなりて飛び懸る。「こは敵はじ。」と安大人、列卒の者が差いたる劍、狩鉞數槍、手に當るを幸に、投げ付け投げ付け打ちかくる。虎は神力自在を得、劍を宙に引咬へく、岩に打當て微塵になす。刃の光り玉散る霰、氷を碎くに異らず。打物盡くれば、官人ども、色めき立つて逃げまどふ。後より和藤内、どつこいやらぬ。」と顯れ出で、安大人が素首を掴んで差上げ、くるくると振廻し、ゑいやつと打付くれば、岩に熟柿を打つ如く、五體ひしげて失せにけり。此の勢に官人ばら、跡へ戻れば悪虎の口、先へ行けば和藤内、仁王立に突つ立つたり。「あゝ、申し御勘忍。御免々々。」と手を合せ、土に喰ひ付き泣き居たり。和藤内虎の背を撫でて、うぬらが小國とて

侮る日本人、虎さへ怖がる日本の手並み覺えたか。我こそ音に聞えたる鄭芝龍老一官が悴、九州平戸に成長せし和藤内とは我が事なり。先帝の妹宮梅檀皇女に巡りあひ、三世の恩を報ぜむ爲、父が故郷へ立歸り、國の亂を治むるなり。さあ、命惜しくば味方に付けいよといへば虎の餌食。否か、應か。」と詰めかくる。「なう、何の否でござりませう。韃靼王に従ふも、李蹈天に従ふも命が惜しさ。向後お前の御家來ども。お情頼み奉る。」と地に鼻着けて畏る。「お、でかしたでかした。さりながら、我が家來になるからは、日本流に月代さかやきそつて元服させ、名も改めて召仕はむ。」と、指添への小刀はづさせ、是も當座の早剃刀、母も手々に受取つて、並ぶ頭の鉢の水揉むや揉まずに無理無體、片端剃るやらこぼつやら。絲鬢、厚鬢、剃刀次第。瞬く間に剃りしまひ、二櫛半のはらけ髪。頭は日本、髭は韃靼、身は唐人、互に顔を見合せて、頭冷つく風引いて、噓々、村さめ村

月代

さめ。」と涙を流すぞ道理なる。親子どつと打笑ひ、揃ひも揃うた供廻り、名も日本に改めて、何左衛門、何兵衛、太郎次郎、十郎迄、面々が國所、頭字に名乗り、二行に立つてぼつ立てる。「承り候。」と、お先手の手振の衆、ちやぐ忠左衛門、東蒲塞かほちや右衛門、呂宋兵衛るすん、東京兵衛とうきん、暹羅太郎、ちやぼ次郎、ちやるなん四郎、ほるなん五郎、うんすん六郎、すん吉九郎、もうる左衛門、じやが太郎兵衛、さんとめ八郎、英吉利兵衛、今參りの御供先、跡に引馬、虎斑の駒、母を助けて孝行の、名を取り口取り、國を取る、譽は異國、本朝に踏み跨げたる鞍鐙、虎の背中に打乗つて威勢を千里に顯せり。

(國姓爺合戦)

室鳩巢

名は直清。徳川幕府の儒官。江戸の人。享保十九年(一八〇四)歿。享年七十七。

王

享保十七年(一八〇二)歿。

白駒の隙云々

「人生、於天地之間、如白駒之過隙。」

董

「下帷發憤讀書、三年不窺園。」

程

程朱

二程子及び朱子。二程子は程頤及び其の弟程顥。朱子は朱熹。共に道學者。

鄒

魯の風

鄒は孟子の生國。魯は孔子の生國。よつて孔孟の學風をいふ。

韓・歐

唐の韓愈、宋の歐陽修、共に大家である。

富貴は云々

「不義而富且貴、於我如浮雲。」

禍福は云々

「禍之與福何異、糾纏。」

(賈誼の鵲鳥賦)

「發鳩之山有鳥、曰精衛。常取西山之木石、以填東海。」

(山海經)

「笑自不量。」

(韓退之)

精衛が云々

「發鳩之山有鳥、曰精衛。常取西山之木石、以填東海。」

(山海經)

「笑自不量。」

(韓退之)

精衛が云々

「發鳩之山有鳥、曰精衛。常取西山之木石、以填東海。」

(山海經)

「笑自不量。」

(韓退之)

精衛が云々

「發鳩之山有鳥、曰精衛。常取西山之木石、以填東海。」

(山海經)

一五 壬子試筆の詞

室鳩巢集

日月迭に移つて、白駒の隙すぎ易く、衰病日に侵して黄金の術なり難し。されば犬馬の齡、これまであるべしともおもはざりしが、いつしか老の波より来て、今年七十あまり、五つの春にもなりぬ。あまつさへ近き頃より身に痿疾を得て、手足もあがらず、起居もなやめるまゝに、昔の董生を學ぶとはあらねども、この三とせ春の園を窺ふこともかなはねば、閨の中ながら梢に傳ふ鶯の音にのこりの夢をさまし、枕にかをる梅が香に過ぎし昔をしのぶばかりになむありける。しかはあれど幸に若かりし時より學びの窓に年を経るかひありて、程朱の道に従ひて鄒魯の風を尋ね、韓歐が文を好みて邯鄲の歩を學ぶにぞ老の寢覺も慰みぬ。さて多多くの年月を経て、世の移り變る有様を考ふるに、盛衰榮枯互にゆきかふをば、夢とかいはむ現とやいはむ。まことに、富貴は浮べる雲の如く、禍福は糾へる繩の如しといへるに何の違ふことあるべき。中にたゞわが聖人の立てたまへる三綱五常の道のみ、天地と並び傳へ、古今のへだてなく、こればかりは變ることあるべからず。人として仰ぎ崇ぶべきはこの道ぞかし。然れども儒教世に行はれざりしより、人々義理にうとく利慾にさとくなる程に、五常の道すたれて、風俗日に下りゆくこそなげかはしけれ。もとよりのやしき身にて、一代の風教を維持せむとすとも、わが力及ぶべきにあらねば、ひとへに蚍蜉の樹を撼かし、精衛が海をうづむるに似たるべし。さはいへど世を憂へ、民を新たにすもわが儒分内のことなれば、これを度外に置くべきにもあらず。よりに思ふに世に老師宿儒と稱する人の、好んで異説をほしいまゝにし、又は他道を雜へて、仁義五常の沙汰をばよそにするこ

そうけられぬ。たゞ務めて新奇を競うて俗耳を悦ばしめ、時好に投ずるなるべし。いと口をしきことなり。古人の所謂曲學阿世とは是等をいふなるべし。

よし人はさもあらばあれ。たとひ風俗は昔にあらざりぬとも、わが身一つはもとの如く仁義の道を守り、唯前修の模範を失はじと思ふこそ、せめて儒となりしるしともいふべけれ。然るにあらたまの春のはじめとて、人は皆おのがじし身の福を萬代と祝ふ中に、我はたゞ五常の道に心をよせて、いつもかはらずめでたきものはこの道なりとて、かくなむ筆を試みるものならし。

(駿臺雜話)

五卷

一六 國體の精華

穂積 八 束

穂積八束
法學博士。愛媛
縣の人。大正元
年歿。年五十三。

我が日本固有の國體と國民道德との基礎は祖先教に淵源す。祖先教とは祖先崇拜の大義を謂ふ。我が日本民族の固有の體制は血統團體なり。血統團體とは民族がその同始祖を敬愛するによりて共存團體を成し、祖先の威力に服従するによりて平和の秩序を維持するを謂ふ。小にしては家を成し大にしては國を成すものなり。祖先崇拜の大義は血統團體を構成し維持するの原由たると同時に、血統團體の存續は又祖先崇拜の大義を鞏固にし深遠にするの成果あり。二者相俟ちて消長し須臾も離るべからず。而して我が固有の國民道德たる忠孝友和信愛の道は、一に皆祖先崇拜の大義に溯源し血統團體を保持するの軌轍たり。我が堅固なる國家の體制は祖先教の基礎に存し、これを千古に建てこれを

溯源

萬世に傳ふるは我が民族の特質にして、我が國體の精華たるところなり。

人は孤立獨存し得べきものにあらず。共同團結以てその生存を全うす。而してその團結する原由と形體とは固より一ならず。但し利害を以て集散し約束を以て協和を維持するものはその團結固からず又久しからず、利害の異同は生活の狀況に隨ひて時に變轉し、人爲の約束は復人爲を以て解除せらるゝを免れざればなり。血族相依るは自然の團結なり。兒孫が父母の保護の下に團欒するは社會の初にして、民族が同始祖の威靈の下に國を成すは天賦の團結たり。血脈相通ずるは天然の連鎖なり。人爲を以てこれを絶つことを得ず。利害の觀念の外に超越し、敬愛の至情に由り、離るべからざるの共同生存を成すものは血統團體なり。血統はこれを祖先に受け、これを子孫に傳ふ。故にその團體は

天賦

永久なり。血族關係は利害を以て離合斷續するを得ず。故にその團結は鞏固なり。而してこれを統一するものは祖先の威力なり。祖先の威力は對等の約束にあらざるが故に敬愛の情厚く忠順の念深し。家に在りては家長は祖先の威靈を代表し、家族に對して家長權を行ひ、國にありては天皇は天祖の威靈を代表し、國民に對して統治權を行ふ。家長權と統治權とはともに君父がその祖先の慈愛する子孫を祖先の威靈に代りて保護するの權力なり。吾人の今日あるは吾人の祖先が血統團體を建設し維持し遺傳したるの餘慶なり。何が故に血統相近きもの相依りて家を成し、民族を成し、又國を成したるか。祖先を崇拜しその威力と慈愛との下に生存の保護を全うせんと欲する天性の至情に外ならざるなり。汝の父母を敬愛しその慈愛なる保護の權力に従順なる至情は、延いてこれをその父母の父母に及ぼすべし。吾人の祖先の

祖先は即ち畏くも我が天祖なり。天祖は國民の始祖にして皇室は國民の宗家たり。父母拜すべし、況や一家の祖先をや、一家の祖先拜すべし、況や一國の始祖をや。家長の位は祖先の靈位にして、皇位は天祖の靈位なり。父母は現世に在る祖先たり、天皇は現世に在る天祖たり。父母に孝なるべき所由は即ち皇室に忠なるべき所由にして、これを一貫するの國教は祖先の崇拜なり。この大義は吾人の祖先が家國を成したる基礎にして、吾人がこれを永遠に維持するの軌道たるものなり。

人は信仰によりて動作す。限定せられたる人智は宇宙の現象を總合してこれをその根柢の眞理に證明し、絶對の理法を自覺して行動すること能はざればなり。吾人の祖先は肉體の外に不死の靈魂あることを確信し、又子孫の慈愛する父母の威靈は顯界に於てその肉體を亡ふも、なほ幽界に在りてその子孫を保護するこ

とを確信したり。これ祖先崇拜の大義の淵源にして、敬神の我が國教たる所以なり。我が固有の國體、民俗、祖先の祭祀を重んずるより重きはなし。家は祖先の威靈の住む所、國は天祖の威靈の住む所にして、祖先の威靈は家國を防護す。吾人は祖先の生命の繼續にして、子孫は吾人の生命の延長なり。祖先の祭祀を不朽に絶たざるは吾人の肉體に於て代表せらるゝ祖先の生存を永遠に傳へんと欲するなり。祖先と吾人の子孫とが家國の觀念に於て同化しその繁榮にして永久なる存在を全うするの大義こゝに存す。祖先の靈位を現世に代表する君父に忠孝なるは、祖先に忠孝なるなり。君父が臣子を愛護するは、祖先がその子孫を愛護するなり。夫婦の和、兄弟の友、民族の共愛、すべて皆我が同祖の祭祀を重んじこれを永遠に傳へ祖先の家國の鞏固にして永久なることを欲する祖先の遺志に適從する道ならざるはなし。我が祖先崇拜の大

義は國民の確信に出で、不朽の國體はこれによりてその基礎を立て、國民の道德はこれによりて深厚を加ふ。斯の國、斯の民を千古に溯り萬世に互りて保持するものは、この國體の精華たる我が固有の祖先教の力なり。

(國民愛國心)

一七 朗 詠

和漢朗詠集

祝

嘉辰令月歡無極、萬歲千秋樂未央。
長生殿裏春秋富、不老門前日月遲。

謝 偃

保 胤

和漢朗詠集

藤原公任の撰。

平安中期のもの。

の。上、下二巻。

謝 偃

支那唐の貞觀時代の詩人。衛縣の人。

保胤

慶滋保胤。圓融

天皇の御宇の漢

學者。長徳三年

(一五七)歿。

仲 算

讀人知らず

わが君は千代に入千代にさされ石のいはほとなりて
苔のむすまで

よろづ世と三笠の山ぞよばふなる天が下こそたのし
かるらむ

雪

雪似鵝毛飛散亂、人被鶴氅立徘徊。

白 樂 天

紀 友 則

雪降れば木ごとに花ぞ咲きにけるいづれを梅とわき
て折らまし

仲 算
平安朝時代の高僧。

白 樂 天

名は居易。支那

唐代の詩人。大

中元年(西紀八四

七)歿、年七十五。

紀 友 則

四四頁頭註參

早春

都良香

貞繼の子。文章博士。醍醐天皇の御宇の人。元慶三年(三五元)歿。年四十六。

雨氣霽風梳新柳髮、氷消浪洗舊苔鬚。

都良香

志貴皇子

天智天皇の御子。施基皇子か。

志貴皇子

いはそゝぐ垂氷の上の早蕨の萌えいつる春になり
けるかな

春夜

白樂天

背燭共憐深夜月、踏花同惜少年春。

躬恒

凡河内躬恒。古今集撰者の一人。

躬恒

春の夜のやみはあやなしうめの花いろこそ見えね香
やはかくるゝ

上高鬼貫

俳人。攝津國(兵庫縣)の人。元文三年(三三九)歿。年七十八。

上高鬼貫

一八 四季折々

鶯は、聲珍しき朝より、障子にうつる日影ものどやかに覺え、き
ふけふ野山もけしきだちて、閉ぢたる水もおのづから流るゝ比、聲
も共によくほどけて、霞に伴ひ花に遊ぶ。又青葉が枝に轉るころ
はひたすら惜しき。

蛙は水の底にて鳴きそむるより、上に出でて雨戀ふ聲もあはれ
に、旅にあれば故郷の空なつかしくあるは夜すがら野になく、聲の
枕につたふ寢覺こそたゞならね。

柳は、花よりもなほ風情に花あり。水にひかれ風に隨ひてしか
も音なく、夏は笠なうして休らふ人を覆ひ、秋は一葉の水にうかみ

寢覺こそたゞならね

て風に歩み、冬は時雨におもしろく雪にながめ深し。

郭公の比は、誰もみな空に心を置いて、月にあこがれ、雨にしたへど、稀にも聞かぬ折節は、もし夢のうちにや鳴きつらむ、人もや聞きつらむと、ねざめくをうらみ、又たまさかにも聞きつる後は、なほ慕はしく、人の家より文もて出づるをも、いかなる心をや言ひおくりけむとゆかし。

蓮の花は、朝のながめ一入いさぎよく、晝は又涼し。夕暮は心沈む。此の花、佛の物に心移りて見れば、さかり久しからずして、散りぎはのもろきも尊し。猶深く賞して、觀念の奥に至らば、埋れたる佛性、終に忘心の泥をも出づべし。

觀念

蟲は、雨しめやかなる日、蟻のほとりにおろく、鳴き出でたる、晝さへ物あはれなり。月の夜は、月にほこり、闇の夜は、闇にむもれず。あるは野ごしの風におのれく、が吹き送る聲、いつ死ぬべしとも聞えねど、秋限る命の程ぞはかなき。つくねんとして、夜も更け心も沈みて、何にこぼるゝとは知らぬ涙ぞ落つる。

神無月は、春に似てうるはしく、花は櫻が枝にかへりて、佛を見ずるとすれど、其の色打ちかはきて、さすがになやめるが如し。夕陽はやくめぐり、夜たけなはにして、空ゆく風枕にこたへ、木の葉の雨軒にぞそぼちて、更に秋の寝ざめをうしなふ。

霰は、松にたまらず、竹に聲もろく、地に落ちては、米籾るに似たれば、雀、鶏などの、まどひて嘴を費しけるも、わりなく見ゆ。消ゆる

わりなし

ことは露よりも猶すみやかなればながめも亦共にいそがし。
 煤拂は人の顔みな埃におぼれて、誰とも更に見えわかねば聲を
 姿に呼びかはすもをかし。又置きどころ忘れて、日ごろ尋ぬれど
 も見えざりし物の出でなんどしたるは、我が物ながら拾ひたる心
 地ぞする。

餅搗は、家々に其の日をたがへず、けふはあすはと親しき人々行
 きかはして、どりどり賑ふ中に、老いたる女の例知り顔に下知なん
 どしたる家は、物ごもりて見ゆ。又幼き人の柳が枝に餅むしり附
 けて花と見る喜びこそ、其の昔戀しくは侍れ。

(ひとりごと)

一九 梅花の氣品

豊島與志雄

豊島與志雄
 小説家。東京帝
 國大學講師兼法
 政大學教授。福
 岡縣の人。明治
 二十三年生。

梅花の感じは氣品の感じである。

氣品は一の芳香である。眼にも見えず、耳にも聞えない、或風格
 から發する香りである。甘くも、酸くも、辛くもなく、それ等のあら
 ゆる刺戟を超越した、えもいはれぬ香りである。人をして思はず
 鼻孔をふくらませせる無味無臭の香りである。それと明らかに
 捉へることはできないが、それと明らかに感じ識られる一種獨得
 な香りである。どこからともなく、何故にともなく、どこへともな
 く、自らに發散して漂つてゐる浮游の香りである。うつすらと霧こめた未明の微
 光に、或は寂しい冬日の明るみに、或は佗しい夕の靄に、或は冷え冷
 えとした夜氣に、仄に織り込まれて、捉へ難く、觸れ難く、たゞ脈々と

一九 梅花の氣品

九五

感 覺

感 服

自 若

漂つてゐる一種獨得な梅花の香りは、俗塵を絶した氣品の香りである。その香りを感してその花を求めるのは、俗であり、愚である。花の在所を求めないで、漂つてくる芳香に心を澄す時、人は氣品の



梅 月 (荒木寛 諷筆)

る。肥大でなく、矮小でなく、膨脹せず、萎縮せず、賑やかでなく、寂しくなく、たゞあるがまゝに満ち足つて、空疎を知らず、漲溢を知らず、恐れることがなく、蔑むことのない清爽たる氣魄である。

本體を識るであらう。氣品はまた一の凛乎たる氣魄である。衆に媚びず、孤獨を恐れず、己の力によつて自ら立ち、驕らず、卑下せず、霜雪の

それはまた梅花の氣魄である。霜雪の寒さを凌ぎ、自らの力で花を開き、春に魁して微笑み、しかも驕ることなく、卑下することなく、爛漫たる賑やかさもなく、荒涼たる寂しさもなく、たゞ靜に己の分を守つて、寒空に芳香を漂はせてゐる姿は、正に氣品そのものの氣魄である。しみぐと梅花に見入る時、恐怖や、蔑視や、悲哀や、歡喜など、すべて心を亂すやうな情は靜まつて、たゞ氣高い氣品の氣魄に、人は自ら打たれるであらう。

氣品はそれ自身の性質からして、清淨な白色たるべきである。赤や、青や、黄など、何等かの花に染められた氣品は、世に存しない。もとより、赤や、青や、黄や、紫など、さういふ色彩が持つ事のできる氣品はあるけれども、氣品そのものの色は、どこまでも白色であらねばならぬ。しかし、單に白色だけでは足りない。純白の氣分を破らない程度に於て、何等かの點彩を要する。鮮やかな一點の色彩

を包んだ純白、それが氣品の色である。

かゝる氣品の色はまた梅花の色に見られる。黎明や薄暮の微光の中に浮き出すほの赤いまでの白色、白晝の外光や深夜の闇の中に浮き出すほの蒼いまでの白色、または月光に照し出される薄紫にまがふまでの白色、その白色の花弁の中に、花粉の黄を小さく點出した色彩は、氣品そのものの色彩である。それに瞳を凝らす時、人は自ら心が清々しくなつて、氣品の妙趣を覺るであらう。

氣品には一の滋味があり、しかも同時に一の新鮮味がある。氣品は舊守でもなく、また新奇でもない。純粹な氣品は、骨董と新考案とを包含し、兩者を調和したものである。老と若と、舊と新とを寄せ集めて、しかもそのいづれでもなく、老と舊との滋味を取り、若と新との新鮮味を取り來つた一種恆久性なものである。古さからくる佶屈聲牙と、新しさからくる自由暢達との兩者を具有して、

永遠性

老若

舊的
新鮮

かたがわりく
ききにしく

文章の
整理

しつくりと落着いたものである。

この種の落着きはまた梅樹に見られる。鋭角度をなして、ぐいぐいと曲つた古木から、すいぐいと若枝を伸ばし、若きを育てる力を内に藏した老幹と、老を生かす力で伸び上る若枝とが、しつくりと一つの氣分にまともまつて、蒼むした古い樹皮と、艶々しい新たな樹皮とが、一様に花を咲かせてゐるのは、正に氣品そのものの姿である。老いた枝と若い枝とを擇ばずに、一様に咲きにほつてゐる梅花を眺める時、輕佻と鈍重とを超越した氣品の沈靜に、人は自ら味到するであらう。

氣品はこの世には稀である。それは地上のものといふよりも、寧ろ多く天上のものである。この地上に在つては、その本來の面目を汚されるといふのではないが、そこに在るには餘りに清らか過ぎる。しかし、それを地上に引きおろして己が所有としたとこ

味到

眞の天上の存在
天地として水の
世を
在二層

るに、人の魂の朗らかさがある。地上から天上へと人の魂が架けわたした多くの橋梁の中の一つが、そこにあるともいふことができる。それ故に氣品は一の抽象であつて、一の具象ではない。随つて氣品はどんな人にも親しまれ易い。

梅花の感じは氣品の感じである。けれども梅花は一の抽象ではなくて、具象である。それ故に人に親しまれ難い。餘りに芳しい香りを漂はせ、餘りに凜乎たる氣魄を示し、餘りに清らかな色彩を有し、餘りに妙味のある樹に咲くので、人間離れのした感じを以て、人を却けがちである。しかし、梅花に瞳を定めてその香りに心を澄すことは、必ずしも詩人に取つてばかりではなく、普通の人々に取つてもよい。なぜかといふに、それは地上の息吹に天上の息吹を交へることだからである。新たな心を以て梅花に接し、新たな心を以て梅花に親しむことは、梅花に人間味が少いが故に、益、梅

環境

花が天上的であるが故に、益、人間にとつてよいのである。この意味に於て、眞に梅花を観るには、雑沓の巷や、廣い梅林や、人工的な盆栽や、又は月明の夜などに於てよりも、寧ろ自由な、晴々とした境地に於てするのがよい。必ずしも美景を要しないが、たゞ自然の風の儘の枝振に、ぼつり／＼と花をつけ、仄な香りを漂はしてゐるのを、少し冷やかな二月の夜明、薄霞の晴れやらぬ頃、爽やかな空氣を吸ひ、小さな霜柱を踏みしだいて、ふと氣づいた儘何氣なく足を止めて、しみ／＼と見入り嗅ぎ入る心持、それこそ眞に梅花を観るの境地である。その一本の老樹のたゞずまひと、その清らかな花の姿と、その脈々たる香りと、その清冷な早朝の空氣とは、たゞ一つ梅花の氣品となつて、人の心に浸み通るであらう。それをも卑俗といふものは卑俗のみを知つて、高潔を知らぬ徒輩である。(旅人の言)

志田義秀
國文學者。東京
帝國大學講師。
富山縣の人。明
治九年生。

二〇 表現せざる表現

志田 義秀

維摩
維摩詰。釋迦と
同時代の人。そ
の教化を輔く。

山谷
黃庭堅。支那宋
の詩人。

南畫

間

「言はぬは言ふにまさる。」と云ふことは、世の中の人々が能く云ふことである。それでゐて饒舌を逞しうせずにもられぬのが人の常である。「維摩の一黙、その聲雷の如し。」と云ふやうに、沈黙は雄辯であることも吾々は承知してゐる。それでゐて沈黙であり得ないのが吾々の常態である。詩人山谷は、萬言萬當不如一黙^カと云ひながら、多くの詩を作つてゐるのである。

然るにこの言ふにまさる無言、沈黙の雄辯が、藝術の形式として取扱はれれば、こゝに恐しい藝術が出来上るのである。南畫の餘白、俳畫の省筆、茶道の靜寂、禪の默想、能樂の中入、邦樂の間、俳句の句切などが即ちそれである。茶道の靜寂、禪の默想も、藝術的境地と見られよう。言ひ換へれば、表現せざる表現が、表現以上の藝術的

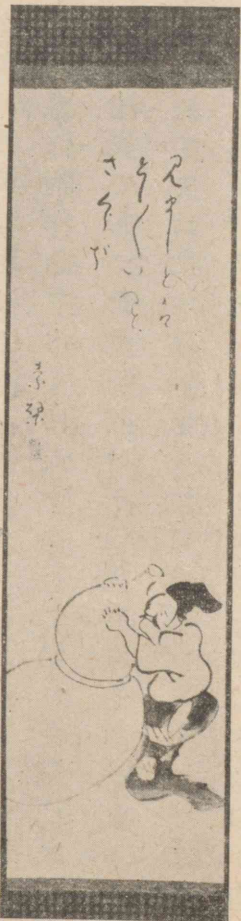
大須賀乙字
名は續。俳人。
俳論家。元東京
音樂學校教授。
大正九年歿、年
四十。
蛇足

世阿彌
名は元清。室町
時代に於ける能
樂の改革者。嘉
吉三年(三〇三)
歿、年八十一。

効果を収め得るので、かゝる藝術的形式を發達せしめて、今日猶完全に之を持續してゐるのは、恐らくは我が日本のみであらう。この事に就いては大須賀乙字が特に論じて居り、早く氣づいてゐる人もあるのであるが、私も茲に蛇足を試みようと思ふのである。能樂の改革者として、寧ろ嚴格な意味に於ける能樂の創始者として、作舞作詞作曲すべてに天才を有し、優れた作家で同時に優れた評論家であつた世阿彌は、その能樂觀を述べたものの中に、動く事を表すには、動かない事を以てせねばならぬと云ふ意味の事を述べてゐる。激動を表すには、無動を以てするのが有效であると云ふのである。當流には、「總べて早態^{はやわざ}戒むる也。」とも云つてゐる。世阿彌は、かゝる藝術觀を以て猿樂の改革を謀つたので、従つて世阿彌以前の猿樂は、激動は激動を以て表す主義のもので、跳躍的の舞踏劇を基本となした事は、この點からも推せられるので、世

象徴的藝術

阿彌に至つて始めて表現せざる表現の効果を認めて、暗示的象徴的の手法に依る、高級な象徴的藝術たる今日の如き能樂を打建てたのである。されば能樂は、その中入を考へるまでもなく、能全體が既に表現せざる表現の主義に依つてあるもので、従つて形式全



素 樂 筆

見まじとは
としぐいへど
さくらかな
素 樂

體として、茶道の靜寂、禪の默想、俳畫の省筆に類すると云へるのであるが、而もかゝる全體の形式と共に、その焦點たる妙所をなすものは中入であるから、かゝる全體觀から云へば、能樂は、餘白を有する暗示的繪畫たる南畫、句切を有する暗示的文學たる俳句に類す

ると云へるであらう。

私はかつて友人から、マールブルヒ大學の神學教授ルードルフ・オットー氏の「聖」といふ神學書の所説を聞く事を得た。同書は、神に對する感情を髣髴せしめ得るものは、音樂を聞く時の感情であるとし、それも樂曲を聞きつゝある時の感情よりも、曲を終へて樂器が靜寂に歸し、聽衆が沈黙を守つてゐる時（同書はこゝに「沈黙」といふ言葉を用ひてゐるさうであるが）の感情であると云つてゐるさうである。私は之を非常に面白く聞いたのである。

終曲の後の沈黙が、神に對する感情を髣髴せしめるものであるとの所論は、吾々には如何にも耳よりな論である。終曲後の沈黙にこれ程の至妙至靈の意義を考へるのは、やがて藝術上に於ける表現せざる表現の至妙至靈の効果を認めるものと云へるであらう。而も奏樂後の沈黙といふことは、何れの國に於ても共通的に

マールブルヒ大

學
ドイツ最初の新
設大學。
ルードルフ・フー
ト

西紀一九一七—
一九三〇までマ
ールブルヒ大
學に勤む（六充
し）。
髣髴せしむ

耳よりな論

至妙至靈

考へられることであるが、我が國に於ては、それ以上にそれが音楽に於ける間や、能樂に於ける中入として存するのであり、又同じ意義のものとして、茶道や禪に全體的形式として存するのであり、音樂以外のものとしては、南畫の餘白、俳句の句切として存するのである。

沈黙の雄辯

西諺にも「言談は銀、沈黙は金」といふやうである。オットー氏のこの見方は、畢竟沈黙の雄辯といふことを強調して考へて、そこに神秘的の或物の存在を認め、一面又宗教味と藝術味との極致に於ける一致といふことにも觸れてゐると思はれる。

彼の地の表現主義といふものが、我が國の一部でも奉ぜられてゐるやうである。併しながら、彼の表現主義なるものは、自然主義の唯物的思想の反動としての唯心的の思想が、種々な主義を生み來つた後、遂に極端に行きついて生じたもので、世界大戰の慘禍を

表現主義
自然主義

文化交流

經た彼の地の國民の生み出したもの、又生み出すべきものであつたのである。今猶未完成の主義と見られてゐるやうでもあり、又彼の地の國民に於て始めて意義あるものと思はれる。我が國の非表現的表現主義は、無主義も亦主義であると同じ意味で、やはり一種の表現主義と云へるけれども、彼の表現主義とは、歴史を異にし、その意義を異にすると共に、悠久性を帯びるものであるが、世界的に文化交流の行はれつゝある今日、そして彼に於て東洋研究、特に日本研究の盛んになりつゝある今日、彼の地の思想界或は藝術界の一面に迎へらるべき可能性があると思ふのである。要するに藝術は、必然な内心の要求から生れるものであるとすれば、大戰の慘禍を直接に經驗した結果の焦燥と絶望とを感じない我が國の國民に、彼の表現主義のやうな藝術が必然に生れねばならない理由が、私には發見されない。由來我が國民は、嘗ては對岸の大陸

浮世繪
ゴーホ
オランダの畫家。西曆一八九〇年歿、年三十七。



家舍田のーリマ聖 (筆ホーゴ)

に對し、明治以來は歐米に對して、餘りに受動的であり、輸入的であり、模倣的であると共に、自己の有するものの價値と尊さを忘れ勝であつた。そして我が國の浮世繪に據つて創造されたゴーホの畫が、我が國に逆輸入的に迎へられたりもしてゐるのである。受動的であるばかりが國民の能ではないであらう。

(俳文學の考察)

二羽衣

シテ 天人
ワキ 漁夫白龍
ワキツレ 同行の漁夫
場所 駿河
季節 春

謠

曲

風早の云々
「風早の三穂の浦曲を漕ぐ舟の船人騒ぐ浪立つらしも。」
(萬葉集)
萬里の好山云々
「萬里、好山雲乍、斂、一樓明月雨初晴。」
(詩人玉屑陳文惠の詩)
忘れぬや云々
「忘れぬや清見が關の波間より霞みて見えし三保の浦松。」
(中務卿親王、續古今集)

ワキ、サシ、ワキツレ「一聲」風早の、三保の浦曲を漕ぐ舟の、浦人騒ぐ浪路かな。ワキ、サシ、ワキツレ「謠」萬里の好山に雲忽ちに起り、一樓の明月に雨初めて晴れたり。

げにのどかなる時しもや、春のけしき松原の、浪たち續く朝霞、月ものこりの天の原、及びなき身の眺めにも、心空なる景色かな。
ワキツレ下歌、忘れぬや、山路をわけて清見瀉遙に三保の松原に、たちつ

風むかふ云々
「風むかふ雲の浮浪立つと見て釣せぬさきに歸る船人。」
（冷泉爲相、瀟湘八景、速浦歸帆の歌）

れいざや通はむ。上歌風むかふ雲の浮浪たつと見て、釣せて人や歸るらむ。待てしばし、春ならば、吹くものどけき朝風の、松は常磐の聲ぞかし。浪は音なき朝なぎに、釣人多き小舟かな。釣人多き小舟かな。ワキ詞、われ三保の松原にあがり、浦の景色をながむるところに、虚空に花ふり、音楽聞え、靈香四方に薫ず。これたゞごとと思はぬところに、これなる松に、美しき衣かゝれり。寄りて見れば、色香妙にして、常の衣にあらず。いかさまとりて歸り古き人にも見せ、家の寶となさばやと存じ候。

シテ詞、なう、その衣はこなたのにて候。何しに召され候ぞ。ワキ詞、これは拾ひたる衣にて候ほどに、とりて歸り候よ。シテ詞、それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべき物に非ず。元の如くにおき給へ。ワキ詞、そもこの衣の御主とは、さては天人にてましますかや。さもあらば、末世の奇特に留めおき、國の寶となすべきなり。衣を



羽衣

天人の五衰
天人の命の終る
ときに現れる五
種の衰相。

天の原云々
「天の原ふりさけ
見れば霞立ち家
路までひてゆく
へ知らずも。」
(丹後風土記)

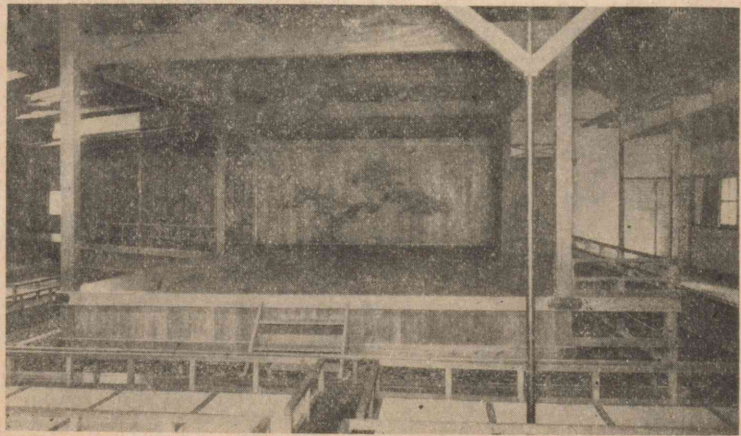
返すことあるまじ。シテ詞悲しやな、羽衣なくては飛行のみちも絶え、天上に歸らんこともかなふまじ。さりとは返したび給へ。

ワキ謠「この御言葉を聞くよりも、いよく、白龍力をえ、もとよりこの身は心なき、天の羽衣取隠し、謠かなふまじとて立ちのけば、シテ謠「今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、あがらむとすれば衣なし。ワキ謠地にまた住めば下界なり。シテ謠とやあらむ、かくやあらむと悲しめど、ワキ謠白龍衣を返さねば、シテ謠力及ばず、ワキ謠せむかたも、地謠涙の露の玉鬢、かざしの花もしをく、と、天人の五衰も、目の前に見えてあさましや。

シテ謠天の原ふりさけみれば霞立つ、雲路までひてゆくへ知らずも。地謠住みなれし、空にいつしかゆく雲の、羨ましき景色かな。上歌「迦陵頻伽のなれく、し、聲今更にわづかなる、雁がねの歸りゆく天路をきけば、懐しや。千鳥鷗の沖つ浪、行くか歸るか春風の、空に吹

くまで懐しや。

ワキ詞いかに申し候。御姿を見奉れば、餘りに御痛はしく候ほどに、衣を返し申さうずるにて候。シテ詞あらうれしや。こなたへ賜り候へ。ワキ詞「しばらく。承り及びたる天人の舞樂、たゞ今こゝにて奏し給はば、衣を返し申すべし。シテ謠「うれしや、さては天上に歸らむことを得たり。このよるこびにとてもさらば、人間の御遊のかたみの舞、月宮をめぐらす舞曲あり。たゞ今こゝにて奏しつゝ、世のうき人に傳ふべし。さり



能舞臺

ながら、衣なくてはかなふまじ。さりとはまづ返し給へ。ワキ詞

「いや、この衣を返しなば、舞曲をなさでそのまゝに、天にやあがり給

羽衣

早の三保のうらわを漕ぐ船の浦く
駢は踏むを 三保の松原よ
白龍と申も海夫と申も 萬里の好山よ
雲忽ちよ起り、一樓の明月は雨始めて
晴りげよ長閑も時もや春の気色

羽衣 謠曲 本

ふべき。シテ詞いや、疑ひは人間にあり。天に偽なきものを。ワキ詞あらはづか返し與ふれば、シテ謠「少女は衣を着しつゝ、霓裳羽衣の曲をなし、ワキ詞「天の羽

衣風に和し、シテ謠「雨に濕ふ花の袖、ワキ詞「一曲をかなで、シテ謠「舞

ふとかや。地謠「東遊の駿河舞、この時や始めなるらむ。

クリ地謠「それ久かたの天といつば、二神出世のいにしへ、十方世界を定めしに、空は限りもなければとて、久かたの空とは名づけたり。

春霞云々

「春霞たなびきにけり久かたの月の桂も花や咲くらむ。」

〔紀貫之、後撰集〕

天つ風云々

「天つ風雲の通路吹きとちよ乙女の姿しはしとどめむ。」

〔良岑宗貞、古今集〕

君が代は云々

「君が代は天の羽衣稀に來てなづともつきぬ巖なるらむ。」

〔讀人知らず、拾遺集〕

孤雲の外云々

「笙歌遙聞孤雲上。聖衆來迎落日。」

〔大江定基、篋篋〕



シテ、サシ謠しかるに月宮殿の有様、玉斧の修理とこしなへにして、地謠「白衣、黒衣の天人の、數を三五にわかつて、一月夜々の天少女、奉仕を定め役をなす。シテ謠、我も數ある天少女、地謠、月の桂の身をわけて、かりに東の駿河舞、世に傳へたる曲とかや。クセ、春霞たなびきにけり久かたの月の桂も花や咲く。げに花かづら色めくは、春のしるしかや。面白や天ならで、こゝも妙なり天つ風、雲の通路吹きとちよ。少女の姿しはしとゞまりて、この松原の春の色を三保が崎、月清見瀉、富士の雪、いづれや春の曙。たぐひ浪も、松風も、のどかなる浦の有様。その上、天地は、何を隔てん玉垣の、内外の神の御末にて、月も曇らぬ日の本や。シテ謠、君が代は、天の羽衣稀にきて、地謠、撫づとも盡きぬ巖ぞと、聞くも妙なり東歌。聲そへて數々の、笙笛、琴、篋篋、孤雲の外に充ち満ちて、落日の紅は蘇命路の山をうつして、緑は浪に浮島がはらふ嵐に花ふりて、げに雪を廻らす白雲の袖ぞ妙な

る。シテ謠、南無歸命月天子、本地大勢至。地謠、東遊の舞の曲、シテ、ワキ謠「あるひは天つみ空の緑の衣、地、または春立つ霞の衣、シテ、色香も妙なり少女の裳裾、地謠、左右左、さいう颯々の、花をかざしの天の羽袖、靡くも返すも舞の袖。キリ地謠、東遊の數々に、その名も月の宮人は、三五夜中の空にまた、満願真如の影となり、御願圓滿、國土成就、七寶充滿の寶をふらし、國土にこれを施し給ふ。さるほどに時移つて、天の羽衣浦風に、たなびきたなびく三保の松原、浮島が雲の、愛鷹山や富士の高嶺かすかになりて、天つみ空の霞に紛れて失せにけり。

〔觀世流謠曲〕

三三 末ひろがり

狂言記

大名 立烏帽子・素襖袴・小刀。

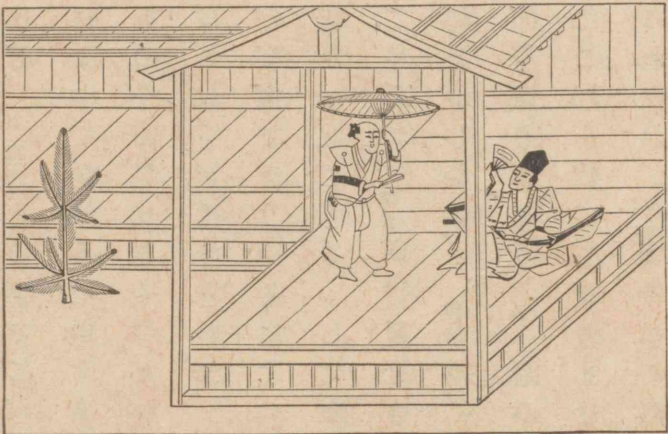
冠者 半袴。

盗人 括り袴・傘。

大名罷り出でたるは、隠れもない大名。太郎冠者あるか。冠者御前に。大名念なう早かつた。汝をよび出すは別なる事でない。明日はいづれも申し入れうと思ふが、何とあらうぞ。冠者まことに内々は御意なうても、申し上げうと存ずるところに、一段でござりませう。大名よからうな。冠者はつ。大名さうあれば、引出物には何をか出さうな。冠者されば、何が好うござりませうぞ。大名やい、思ひ付けた。下からは、上が計らはれぬものぢや。某は末ひろがりを出さうと思ふが、何とあらうぞ。冠者ようござりませう。

せう。大名汝は大儀ながら、上方へ上り、急いで求めて参れ。冠者

頼うだる者



末ひろがり

「畏まつてござる。大名急げ。冠者はつ。扱もく、某が頼うだる者は、立板に水を流すやうに物をいひつけられます。まづ急いで参らう。とかう申すうちに、都さうにござりまする。やれ扱失念の致した。末廣屋を存ぜぬが、何と致さうぞ。えい、欲しいものは呼ばはるていて見えてござる。某もこれから呼ばはりませうぞ。末廣買はう、末廣買はう。すり罷り出でたるは、洛中に住居する、心もすぐにない者でござる。何者やら、どんどんと申すほど

に、さわたつて見ませうぞ。なうく、其方は何をわつぱとおしやるぞ。冠者その事でごさる。田舎者でござれば、末廣屋を存ぜぬによつて、かやうに申す事でごさる。すりなう其方は、末廣といふものをお見知りやつたか。冠者なう都人とも見えぬ。知つたればこれを買はうといふ。すりなうく、誤りました。某は末廣屋の亭主でをりやるによつて、懇に問うてをりやる。冠者は仕合せな事でごさる。して末廣の出来合はござるか。すりなかくごさる。冠者いで見せさつしやれ。すり心得てござる。それに待たつしやれ。冠者は。すりやれ扱、賣らうとは申してござるが、何を賣りませうぞ。思ひ付けてござる。これに傘がござるほどに、これを持って賣りませう。なうく、田舎人、それにござるか。これく。冠者や、これが末廣でござるか。すりなかく。冠者「どれ見せさつしやれ。すりこれ、ごろんぢやれ。冠者は、誠に廣

げさつしやれたれば、はて、いかい末廣でござる。さりながら、頼うだ人が註文のおこされてござるほどに、これに合うたらば、買ひませう。すりさらば讀ましやれい。冠者先づ地紙好くとしてござる。すりこれく、地紙好くとは、この紙の事をりやる。師走狐の如く、こんくといふほど張つてござる。冠者骨磨きとござる。すりこれく、骨磨きとは、この骨の事、信濃木賊をかけて磨いたによつて滑々致す。冠者要元締めてとござる。すり要元締めてとは、かう廣げて、この金でもつてじつと締めるによつて、こゝの事でごさる。冠者繪は戲繪としてござる。すりふん、これく、田舎人これへ寄らつしやれい。えい。冠者なうく、其方は田舎人ぢやと思つて、打擲めさるか。すりいや打擲ではおぢやらぬ。こなたと某と、かうして戯れるを以て、則ち戯えといひます。冠者扱も扱も、註文に合うて嬉しうござる。して價は如何ほどでござるぞ。

すり「高直におちやる。冠者幾らほどござるぞ。すり「萬正でをりやる。冠者「これは又高い事ござる。ちつとねぎりませう。すり「おう、少しなどはぬいてやりませう。冠者「百ばかりになりませうか。すり「なうそこな人、そのやうな下直な物ではない。ようお買ひやるまいぞ。冠者「申し、何と聞かつしやれたぞ。萬正の内をば、百ばかりもぬいて下されまいかといふ事ござる。すり「はあ、聞き分けました。五百ぬいて進じよ。冠者「忝うこそござれ。すり「して代物は、何處で渡さつしやれます。冠者「三條の布袋屋で渡しませう。すり「これで受取りませう。冠者「忝うござる。さらばさらば。すり「なう。冠者「何でござるぞ。すり「其方は定めし主持ちでござる。冠者「なかく。すり「人の主は機嫌の善い事もあり、又悪い事もある。若し自然とも、機嫌の悪しうおちやる。そうば、かう仰しやつたがようおちやる。冠者「扱も、忝うこそ

ござれ。すり「ようをりやつた。冠者「やれ扱、まづ頼うだ者に、急いで御目にかけてうず。殿様ござりまするか。大名「太郎冠者、戻つたか。冠者「歸りました。大名「やら大儀や、急いで見せ。冠者「はつ。大名「こりや何ぢや。冠者「末廣でござります。大名「これがや。冠者「はあ、殿様のお合點が參らぬこそ道理でござります。かう致しますると、きつう廣がります。大名「ふん、まことにこれはいかい末廣ぢやわい。しておのれは註文に合はして來たか。冠者「なかく、合せましてござる。それで讀まつしやれませ。大名「急いで合せを。先づ地紙好しと。冠者「はあ、それこそ念をつかひましたれ。この紙のことござる。師走狐の如く、こんこんといふほど張つてござります。大名「して、骨磨きは、冠者「はつ、この骨の事ござる。信濃木賊をかけて磨いてござるによつて、滑々致します。大名「要元締めは。冠者「かう廣げまして、この

金で締めるをもつて、これが要元締めてといふところでござる。

大名繪は、戲繪は。冠者、それにこそ念のつかひましたれ。それに

待たつしやれませ。いや、覺えたか。大名や、これは、何をしをるぞ。

冠者、いや申し、この柄でかうして戯れるをもつて、ざれえと申しま

する。大名、やいそこな奴、しておのれは知らぬが定か。冠者は、い

や、存じませぬ。大名、知らずばこれへ寄りをる。末廣とは扇の事、

これはおのれ古傘をかうてうせをり、いや末廣で候の、戲繪で候の。

某が前へは叶ふまい。退りしよをる。やれ、さて、憎い奴かな。冠者、ま

ことに頼うだ人のいはるれば、これはさし傘ちやげなものを。ひ

よんな事をいたした。さりながら、都の者も皆まではぬぎませな

んだ。機嫌直しを教へてくれた。まづ急いで申して見ませうぞ。

はやし、いえい、かさをさすならば、かすがやんま、これもかみのちかひ

と、人がかさをさそなら、おれもかさささうよ。げにもさあり、やよ、

囃物

げにもさうよの。いえい、かさをさすならば、かすがやんま、これも

かみのちかひと、人がかさをさすなら、おれもかさささうよ。げに

もさあり、やよ、げにもさうよの。やよ、げにもさうよの。大名、いか

にや、いかにや、太郎冠者、買物にぬかれて囃物をするとは、前代の曲

者身が前へは叶ふまい。冠者、げにもさあり、やよ、げにもさうよの。

やよ、げにもさうよの。大名、買物にはぬかれたが、まづ此方へこげ

入つて、鰻の鮓をばえいやつとほ、張つて、ようか酒を飲めかし。

冠者、げにもさあり、やよ、げにもさうよの。大名、何かの事はいるま

い。人がかさをささうなら、おれにもかさきせやれ。魚ひやるひ

やる、ほつばい、ひやる、ひい。

賀茂真淵

號は縣居。國學者。歌人。遠江國(靜岡縣)の人。明和六年(三十三)歿。年七十

都にありつる程云々

享保十八年(三十九)三十七歳にて京都に上り荷田春滿に師事する。四年の間

今は元文三年(三十九)江戸に出府以後

二三 岡部日記

賀茂 真淵

一家路

あはれ都にありつる程は、あからさまながら年のはに故郷に歸りなどしければ、さのみもあらざりしを、今はたはやすくも歸るまじく思ひなしつれば、千里の遠まに老いたるたらちねを置きまつりて、とみの事ありともいかでかしらむ、しるともいかでかどみにゆきいたらむ、今やいかなる事かあらむ、いかなる心にかますらむなど、人やりならぬ胸さわがれつること日ごとにありしを、世のさがはあはれなるものにて、うつたへに忘るとはあらねども、友がきもいで来て、高いやしきゆきかひしけるに、二つなき心のまぎれやすくて過しぬ。此の秋はいざなふ人さへあれば、いでや母をもをがみ、つま子はらからにも逢はばやとて後の七月八日つとめてた

うつたへに

後の七月 閏七月(元文五年)

ち出づ。

此のあらましい頃、人々別れ惜しむとてからやまとの歌、ひともばかりもあらむかし。そはこと物にしるしつ。友がきのなごりなきにしもあらねど、ちぎりおく日數いくばくならねば、先すゝまゝ心には痛しとも思ほえず。

品川の驛うまやわたりは、海の面ゆほびかなり。夜の雨晴れて、白雲おほく、海の空にかゝれるは、伊豆のみ崎と安房の大山おほやまとなり。此の所は袖の浦とぞいふなど、あをだかく奴のみだりに言ふはをかしきものから、いづくにまれ、ときあらひぎぬ着む日までは、其の名のゆかしきや。朝風いとゞしく身にしむに、

旅人は衣手さむししばしなほ

こゝろして吹け浦の秋風

「關吹きこゆる。」など詠みけむ思ひ出でらる。富士の山はひつ

あらまし

あをだ

關吹きこゆる 「旅人は袂涼しくなりけり關吹きこゆる須磨の浦風。」 (在原行平、續古今集)

をちつとし

じさるの空に見ゆ。是ぞおのが眺むる方なるに、故郷人はこなたをこそと思ふもこたびはうれし。をちつとし東に來にけるほどに、

東路にありて聞きつる富士の根を

夕日の空にかへりみるかな

とながめて、かぎりなく遠くも來にけりとわびつるにはかはれり。

二箱根山

夕つけて箱根山にかゝる。關まではくるしとて、畑といふ所にやどる。いとはや夜さむなれば、ねもいらぬに、瀧の音、鹿の聲、うちこめたる山の秋風、聞きあかされて立出でぬ。ほのくくと明けゆく山のかひよりかへり見れば、朝霧しるくたちわたれるは海を見

湖 蘆の湖。

三巴

支那の四川省の地名。

蠶叢

蜀の開祖の王の名、因つて蜀の地をさす。

見説蠶叢路、

崎嶇不易行。

人面より起る

山、

雲傍馬頭生。

(李白の詩)

ちの實

銀杏の事をさす

といふ。音が同

じところから

かけて用ひる。

「ちのみの父の

みこと、はそ

ばの母のみこと

云々」

(萬葉集)

はそ

杵と書く。櫛の

異名。音が同じ

ところから母に

かけて用ひる。

む心地す。關こゆる程、日さしのぼりて、湖の面のどかに見わたさる。かなたこなた山をめぐれる水の面は、三巴といふや似つらむ。蠶叢に擬したる人はたればかりなるや。其の後いくそばくの人かのぞみ見けむ。此の湖にさせる聞えなきぞあやなき。すべてみ山は雨ばかりあはれなるはなし。こゝかしこくゆり出づる雲の、うすき濃きに、山々はおもかげばかりぞ見ゆる。「人面より起る。」と吟じて越えつる、苦しからぬにしもあらねど、あなをかしと見しはといふに、人々は例の僻心にこそ、いぶせかるべき物ごのみなめり。龍にのるらむ山人にやあつらへましなど笑ふ。辛うじて三島の驛に至る。ふるき歌に「ちの實の父。」とつゞけしは、木の實にて、此の國にありといふ人のありしかば、問ひ求むれど見知れる人もなし。

故郷のはゝその蔭はとひゆけど

ちゝのみなきぞ悲しかりける

三 岡部の家

くれ過ぐるほど岡部の家にいたる。まことに門によりて待ちうけ給ふ。いとなき姪どもなど、走せ來れども、見知らぬ顔なればにやあらむ、とみにもむつれず、なれしばかりの人々は、髪のよもぎは似ずなりぬめれど、くにぶりの詞のみや、しるかりけむ、いづれの所よりとは問はざりける。常はしたしからぬさへ訪ひ來て、日にににきたらふに、庭のよもぎも露かわくひまのありげなり。ここに迄來りにければ、京にもと思ひぬれど、東にちぎりつる日數しあれば、こたみはえまうでぬを、やむごとなきあたりあしからず申し入れ給ひねと文つかはす。

岡部
静岡縣濱松市の郊外。
門によりて云々
「母謂、賈曰、汝朝出而晚來。吾則倚門而望。」
(戰國策)

二四 國學者の業績

岩城準太郎

岩城準太郎
國文學者。奈良女子高等師範學校教授。富山縣の人。明治十年生。

「獨り燈火の下に書をひろげて、見ぬ世の人を友とすることこそ、よなう慰むわざなれ。」とは「徒然草」の名文句であるが、人間と人間とが相互に肺肝を吐露して眞實に諒解するのは、言語文章の媒介によるのである。まだ見ぬ世界の人と魂相通ずるを得るのは即ち「ふみ」のおかげである。

國と國と相知り、國民と國民とが相理解するのは、外交と貿易とのみによるのでない。相互に他の文章を読むことによる。矯飾と辭令とを剃ぎ去つた赤裸の國民は、その創作するところの文學に最もよく活躍するからである。

一國の國民が、その祖先と相面接する思ひをするのは、過去の國民の書き残した文學を読む時である。父祖の遺文に接する時の

辭令

懐しさはいふまでもない。江戸時代の國民、鎌倉室町時代の國民、平安時代の國民、更に溯つて上古太古の國民の、その時代々に創作した文學を繙く時こそ、本當に我が血脈の生々相繋がる宿縁を直觀するのである。

古代國民の面影を髣髴しようとするには、直接古代國民の創作したものに當らねばならぬ。その思想を知り、その感情を解し、その生活に直面しようとするには、一意その遺作遺文を味讀するに限る。我が國民の固有せる生活の眞相を、生き／＼と今日の我等に見せてくれるのは、即ち古典である、古文學である。

歲月の久しきに從つて遺文遺作が亡びる。時代の古きに從つて文筆の人が少い。歴史あつて以來三千年、上世に溯れば溯るほど、典籍が稀になるのである。この稀に存する古文學こそ、本當に貴重な古代の鏡である。祖先の面影を窺ふべき大切なフィルム

味讀

である。これを書き残した上世の文學者は、數多いその代の國民から、特に選り上げられた極めて少數の代辯者であつて、風雨千歳の淘汰を経て今日に傳はつた古典は、眞に天佑によつて生命を全うした稀代の珍寶である。

かう見て來ると、古典の研究は、たゞに古物いぢりの物好きでないのみならず、學問のための學問といふやうなものでもない。必要だの不必要だのといふ理窟の問題でもない。實に我等の衷心の要求からやむにやまれぬ感情の問題である。如上の意味において、自分は古典に對して限りない愛敬を捧げ、探究の念を起すのである。この點に着目し、かくの如き見解から、古典の研究を開始したものは、即ち我が國學者である。

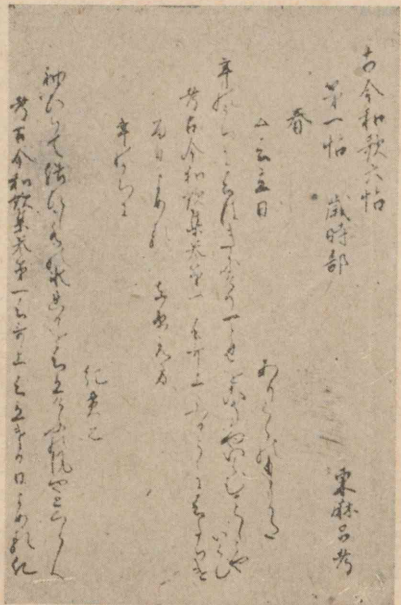
國學者といふ名は可なり廣い意味に用ひられ、從つて曖昧な意味に用ひられてゐる。國文學者、國語學者にも、國史學者、古典學者

にも、神道家、皇道家といふやうな方面にも用ひられてゐる。しかしこゝで國學者といふのは、國文學の創作家でもなく、國語の研究家でもなく、歴史家でもなく、また神道家でもない。すべてこれ等の一面を具へてはゐるが、その本領とするところは、國民的精神をもつて、固有の國民生活を闡明しようとするので、その根本資料として我が古典、古文學を研究する人々である。即ち古典を通じて國民を見ようと努める學者である。

國學といふ言葉は、古く平安朝の文書「菅家遺誠」などに見えてゐるけれども、それは意味が違ふ。上述の意味の學風は、對外的に國民としての自覺が生じた後でなければ起らぬ。佛學あり、漢學あり、こゝに國學が起るので、漢學が漢土の道を講じ、佛學が佛教の道理を説くので、こゝに我が國の古道を闡明しようといふ要求が起る。神道の興起は、この要求と關係はあるが、近古時代の神道は、研

菅家遺誠
人倫の教誡三十
條ばかりを示し
たもので、菅原
道眞の著といは
れてゐる。

究の方法を誤り、頭腦の向け方を知らなかつたから、まだ國學といふ特色的なものにはならなかつた。やつぱり學術的研究の實力が出来て來るのを待たねばならなかつた。



古今六帖稿本卷首
(荷田春滿自筆)

近世江戸時代になつて、學問が始めてその體裁をなして來た。漢學にも、佛學にも、學者と名づくべき者が出て來た。特に漢學の勢が盛んであつた。慶長年間、漢學

興隆の施設をなしてから約百年、これに刺激せられて國學も始めて現れた。國學者なるものが出たのはそれからである。國學の言葉を新しい意味に用ひたのは、荷田春滿だといはれて

慶長
第百七代後陽成
天皇の御代(三
三〇—三三六)

荷田春滿
本姓は羽倉。國
學者。山城國
(京都府)の人。
元文元年(三九〇)
歿、年六十九。

伏見稻荷
今、京都市伏見
區深草町に鎮座
する官幣大社。
享保
第百十四代中御
門天皇の御代。

萬治
第百十一代後西
天皇の御代。

寛文
第百十二代靈元
天皇の御代。

契沖
本姓は下川。國
學者。元祿十四
年(三三六)歿。年
六十二。

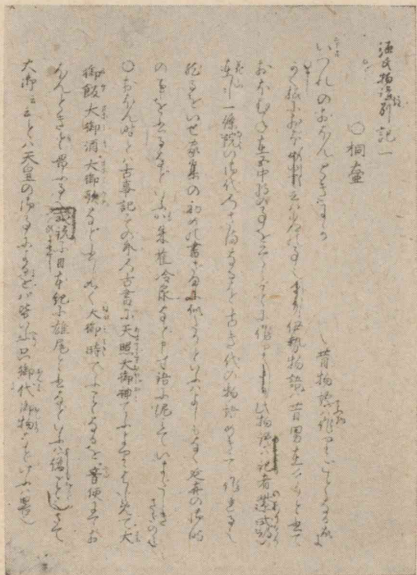
平田篤胤
號は大鋸。國學
者。羽後國(秋
田縣)の人。天保
十四年(三三三)
歿。年六十八。

啓蒙

これ等の人々の忠實熱心な研究によつて、從來暗がりの中に放置せられてゐた古典が漸次に究明せられ、我が懐しい同胞國民の面影をまのあたり見るが如く感ずることが出来るやうになつた。今まではせつかくあの貴重な古典をもつてゐながら、言語解釋の困難であるがために、祖先の心胸に觸れることが出来なかつたが、これ等學者は、まづ言語を討究し、傳説を説明し、歌謠を解釋し、史籍物語等古典の全部にわたつて啓蒙的研鑽に力めたので、我等後生がどのくらゐその餘澤に浴してゐるか計られない。我等は國學者の開いてくれた道に立つて、遠い祖先への面接に急ぐ時、しみじみ有難さを感じて、その功業を讚美しないではゐられない。

(國文學の諸相)

る。春滿は伏見稻荷の神官であつて、享保十三年、京都東山に學校を創立することを幕府に建議した。その啓文に始めて國學の語を用ひたのである。なほ啓文の中に皇國文學ともいひ、國家之



源氏物語註別記
(筆自淵真茂賀)

この意味での國學者は、萬治寛文頃から追々現れて、近く明治時代に及んでゐる。僧契沖、荷田春滿、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤等は、その最も傑出した人物である。

學ともいつて、すべて同じ意義に用ひてあるが、學校の名を國學校と出してゐるのを見ると、國學といふ方が春滿の主として用ひようとした言葉と認めてよろしい。

小西重直
文學博士。倫理
學者。京都帝國
大學名譽教授。
山形縣の人。明
治八年生。

二五 日本精神

小西重直

宇宙の萬物には皆それ／＼個性がある。魚類は鳥類とは違つた個性をもつてゐる。魚類の中でも鰻と鯛とは個性を異にして、人間に各、其の特殊な味を與へて呉れる。人間にもまた各自異なる個性があることは明らかな事實で、例へば氣質の方面より見れば或人は多血質的であるのに他の人は膽汁質的である。憂鬱的の人もあれば粘液質的の人も居る。又文化的生活に就いて見るならば、シュプランガーも詳述してゐるやうに、學者のやうに理論的生活を送らうとするタイプや、藝術的審美的型の人や、實業家の如き經濟人や、宗教的信仰に生きる宗教人、政治家の如く權力といふものに興味を有するもの、社會の爲に奉仕することに最大價値を見出す所の社會人など色々のタイプがあり得ると思ふ。

氣質

多血質
膽汁質

粘液質

シュプランガー
ドイツの哲學
者・教育家(西紀
一八七二—
一九三九)

普遍界

併し眞の個性は孤立的な特殊性ではない。夫は必ず其の個性の所有者が屬する種族の一般性を含み、又宇宙を支配する絶對者としての普遍の世界に徹して居るものでなければならぬ。鰻も鯛も各自特殊の個性を發揮して居るが、兩方共魚類としての一一般性をもつてゐるのである。のみならず彼等は絶對者の普遍界に根ざして居り、自己の個性によつて絶對者の使命を顯現し、實現して居ると見ることも出来るのである。殊に人間にあつては、各自は各、其の特殊の個性をもつて居るが、而も人間としての一一般性を含み、又絶對者の普遍界に根ざして、眞の使命を具體的に此の世界に顯現し實現しつゝあるものである。人間以外のものは自然的に又は本能的に合目的々で、絶對者の使命を果しつゝあるが、人間は意識的に此の事に就いて努力し又憧憬しつゝあるのである。日本國民には日本精神がなくてはならない。獨逸人には獨逸

精神があり、佛國人には佛蘭西精神があるであらう。永い歴史を有する國民は大抵それ〴〵の特殊な個性を有するものである。而も私は日本精神と云ふものは決して孤立的な特殊性ではなく、人間性一般にも通じ、又普遍界に根ざし普遍性を具體的に顯現しつゝある所の大精神であると思ふのである。斯くあつてこそ眞の個性としての日本精神であると思ふ。

抑、宇宙の絶對者の生命は何であるか。何が最も普遍とさるべきであるか、私は絶對者の生命は完全な眞實であると信じてゐる。完全なる眞實程普遍的なものはない、妥當的なものはない。人間の本質も、眞實性であつて、宇宙の絶對者の生命としての完全な眞實が人間に於て顯現され體驗されてゐる譯である。人間は單に生きんとして居るのではない。立派に生きようと努力する。正しく生きようとする、美しく生きようとする、力強く生きようとする

妥當

る、凡べて價值的に生きようとする。従つて物を聽くにも間違はずに正しく聽かうとする。物を見るにも正しい眞相を見ようとし力める。即ち人間は實に眞實的に生きようとするのである。人から欺かれることを求むるものはない。また人を欺くことも實は人間の本心ではないのである。

そして人間に於ける眞實性が具體的に作用する時には、敬・愛・信の三つの作用として表れて來るのであつて、敬・愛・信と云ふ精神は人間界に於ける一切の價値を生む力であり、一切の文化を生み出す所の母である。教育もこれなくしては成立するものではない。此の點は世界の何れの國民にも同様であり、人間一般に共通であるのである。

日本は此のやうな一般的な基本精神に立ち、而も日本獨特の歴史的個性としての、義は君臣にして情は父子といふ美しい精神を

もつて居る。親心と子心の融合、公明な義と情との融合を根本精神としてゐる所の大家族の生活が日本人の生活であり、またあるべきである。而も此の義と云ひ、此の情と云ひ、公明な親心と云ひ、子心と云ひ、皆これ人間の眞實性を基本としてゐるものである。絶對者の完全なる眞實の具體的顯現としての人間の眞實性こそ斯様な義と情との中心生命である。親心・子心の中心生命である。此の意味に於て日本精神の基本ともいふべき大家族の生活は實に人間一般の憧憬する所であり、絶對者の普遍性の顯現であつて孤立的なものではない。

ベスタロッチは宗教的見地から、親心と子心の正しい發展を教育の理想となしたことも一般に知られてゐることである。近代ナトルブなどが親子の間の關係のやうに利害を超越して、内面からの相互の共同生活としての社會生活を教育の理念として説い

ベスタロッチ
ヨハン・ハイ
ン
リッヒ・ベスタ
ロッチ。スキス
の
教育家（西紀一
七
一六二七）
ナトルブ
ハウル・ナトル
ブ。ドイツの哲
學者（西紀一六
五
一―一六四）

て居るのも面白いことである。日本は幸にも歴史的に、利害で結びつく社會ではなく、眞實心で結びつく所の大家族としての生活に恵まれてゐるのである。そしてそれを永遠に發展せしむる使命を有するのである。



チッロタスベ

日本精神の特徴には親一人、子一人でなく、親子合體、親心・子心の融合といふ姿が考へられる。情のみではなく、又義のみでもない。情と義との融合である。理性と情意の一致、理論と實際の一致、天と地との融合、理想と現實の握手といふやうな姿があるやうに感ぜられる。

山陰線で京都から約五時間かゝる所に香住といふ町がある。そこに大乘寺といふ寺があつて、普通之を應舉寺と稱して居る。

香住
兵庫縣城崎郡香
住町

應舉
姓は圓山。畫家。
丹波國(京都府)
の人。寛政七年
(一四五五)歿、年六
十三。

吳春
本名は松村春。
文化八年(一四七)
歿、年七十八。
蘆雪
本名は長澤政
勝。寛政十一年
(一四九九)歿、年四
十五。



應舉筆

應舉の麗筆になれる松に孔雀の莊嚴な作品が寺の正面本殿に其の雄觀を呈して居り、其の次の間は矢張り應舉の名畫で、芭蕉の葉を相手に子供が遊んでゐる愛らしい優美な繪を以て彩られ、其の隣室にもまた應舉の作品としての氣高い優雅な山水の繪を見ることが出来る。云ふまでもなく此の三室は國寶の間である。其の他十六羅漢の屏風や軸物數點も保存されてある。尙此の寺の部屋といふ部屋凡べて七室許りの襖や欄間は、應舉の子息や吳春、蘆雪など應舉の門下の錚々たる十二三名の人々の靈腕に

なつた名畫によつて飾られてゐるのである。寺は全く國寶的な藝術作品の粹を集めた美術の殿堂であるのである。

永遠に薫りの高いこれ等無限の價値を有する美しい作品は、密英といふ此の寺の和尚が應舉に若干の修業金を與へ、應舉は其の御蔭で京都から江戸へ行つて修業することが出来たといふので、其の厚意に對する感謝の表現である。餘りに富裕でもない、むしろ一貧僧が貧書生の畫家を助けた眞實さは有難いものである。京都から香住までの四十里の山野を晩年九箇年に三回も往復して、報恩の誠を盡せる世界的天才に對しては自然に襟を正さざるを得ないのである。

元來藝術的作品といふものは物心一如の形相を表すものであるが、麗筆を揮つて此の天下の名畫を書くやうになつた應舉と密英和尚との兩者の内面的な眞實性に想到すると、實に宇宙の絶對

物心一如

者の普遍性、其の完全な眞實といふ生命……物心一如の形相を創造する所の物心一如の根源的な生命……が感ぜられる。此のやうな美しい眞實心の躍動してゐる藝術品は日本以外に何處に見出さるゝであらうか、私は寡聞にしてこれを知らないのである。實に日本精神の特徴とする物心一如の根源的生命が、此の應舉寺に於て永遠に輝いて躍動してゐるのである。

要するに日本精神の特質とする所のものの中に、義と情との調和、物と心との調和といふやうに、凡べてのものの中の間の調和の姿が見られるやうに思はれる。従つて日本精神には無理がなく、朗らかさがあり、純潔明澄にして而も大調和の崇高さが感ぜられ、天地自然の道としての貴さが味ははれる。

大家族精神で貫かれてゐる日本精神は、正・反・合といふやうな意味の辯證法のものではない。父性や母性の中に矛盾や反對が

辯證法

同似性

含まれて居らない。むしろ父性の中には母性に正しく合一せんとする同似性があり、母性の中には父性に正しく融合せんとする同似性が働いて居る。親心と子心に於てもまた然りである。これ等の中には反對も矛盾も含まれて居るものではない、むしろ各自にそれ〴〵互に正しく合一し融合せんとする敬・愛・信などの基本精神を含んで居るものである。此の意味に於て日本精神は文化の創造、發展の基本精神と見ることも出来る。日本精神は大きな意味に於て文化を生んで之を育て上げる母性のやうなものである。此の故に佛教でも、基督教でも、儒教でも、日本の精神によりて同化されたのみではなく、それ〴〵また新しい生命を吹き込まれてゐる。日本精神は實に苟も眞實なるものに對してはこれを粗末にせず、敬・愛・信の態度を以て、眞實の精神を以て愛育して居るのである。吾々が廣く知識を世界に求むるのもこれが爲であ

る。而も廣大にして慈愛に充ちてゐる親心といふものは世界に於て眞實ならざるものは之を教化し、世界に於て醜惡なるものは之を淨化し美化して、眞實な人間となし、立派な國民となさんとする純な熱情をもつて居るものである。斯様な母性的な態度、親心的な努力に對して妨害を試みるものはこれ實に文化の敵である。こゝにこれを防ぐ所の勇武の精神が起らざるを得ないのである。母親が身を犠牲にして愛兒を保護するやうな決死的奉仕の精神も湧いて來るのである。私は日本精神といふものを孤立的な特殊的のものと見ずに、普遍的な天地の公道として考へて見、感じて見たいと思ふのである。

(思想千秋)

二六 近古の文學

平安朝の小説物語は一變して歴史物語となりたるが、此の時代に入りて更に轉じて軍記物語となりたり。前者は年中行事の平和を記し、後者は修羅爭奪の戦争を記せり。彼の葛藤は人情の弱点より來れる墮落にして、此の波瀾は戦亂の爲の哀別離苦なり。彼の主人公の宿世は自ら招ける所、此の主人公の運命は時世之をして然らしめたるなり。前者の主人公は感情よく意志を支配する能はず、後者の主人公は意思よく感情を支配す。讀者は前者に於て情緒の活動に同情し、後者に於て情緒の抑壓に同情す。全體の境遇より言へば、前者は富貴榮華にして羨むべきもの多く、後者は軼軻落魄悲しむべきもの多し。一は樂天的、一は厭世的、其の對照はよく平安時代と鎌倉時代とを反映せるものといふべく、鎌倉

武人の面影

文學に此の好資料を興へたるものは、保元平治以來、源平二氏の轉變迅速なりし運命の歴史、即ち是なり。保元物語平治物語平家物語源平盛衰記等即ち其の尤なるものにして、武人の戰場に於ける武勇を寫し出せるのみならず、亦其の常人としての情愛をも寫し、戦袍匆忙の裡、尙詩歌音樂の風流を棄てず、武士のなさは全篇を通じて活躍す。而して一貫するに道德節義を以てして、感化の力頗る大なり。國民の有する最大敘事詩として弘く國民に愛讀せられ、永く後世の文學に影響せる、因由なきに非ず。其の語彙文體が、漸く男子の漢文と女子の假名文とを合同して、剛健なる要素と優麗なる分子とを調和し得たるは、恰も其の内容に於て武士の武勇節義と情緒風流との兩方面を表示し得たるが如く、共に外來の文化と國民本來の特質との一層相融合せる近古時代を反映せるに外ならず。

教訓的文學

此の時代に於ては、文學は著しく教訓的と成り來れり。軍記物語中に於て人の興亡盛衰を敘するや、必ず内外典の語を引き、天竺震旦の例を援いて之を證明し、又各種の技能藝術に於ても、往々何等かの由來變遷を説き、學究的講釋を交ふ。是を以て、談動もすれば、岐路に入るを免れず。是一般の社會が無學にして、少數の知識あるものの益、術學的となれる當時の情態を示すものに非ずして何ぞ。あらゆる藝能は皆世襲となり、一技一藝悉く祕事祕訣を傳ふるに及びて、尙古の嗜みは靡然風を成し、一切の事物に益、煩瑣なる儀式を尊び、其の緣起由來を重んずるに至れり。武人は學ばず、學問あるものは僧侶のみ。然れども僧侶は朝儀に暗し。儒佛を兼修せる僧侶が、一方に於て社會の耳目となり、朝儀典禮に明るき公家が、一方に於て有職故實の淵源と仰がれたるは自然の勢といふべし。故に教訓的文學の兩極端を擧ぐれば、一方に於て佛家の

和歌

法話あり、一方に於て公家の歌學あり。

何事の模範も花の如き平安時代に在り。況や和歌は朝廷と其の縁故最も深し。日本固有の文學として萬世悠遠の朝廷と其の起原を等しうせる感あるが上に、延喜以來の勅撰集は益々朝廷と密接の關係を生ぜしめ、朝廷の政權を失ひたる後は、敷島の道は唯歌道と思惟せらるゝに至れり。而してすべての藝能に行はれたる知識の專賣は亦斯道にも及べるを以て、和歌の師範家は奕世和歌に關する知識の本源として目せられ、いよく煩瑣なる法則を以て、和歌の用語思想をも束縛するに至れり。かくの如くにして、如何でか其の發達を望むべき。鎌倉の初の新古今集は、當時名匠多く、歌風清新、古今集の理窟の歌に反して敍景の歌多く、句法も亦變化して觀るべきもの尠からざれども、新勅撰續後撰以下彌下りて彌衰へ、勅撰集は積んで二十一代集を數ふれども、文學として新機

連歌

運に關係せるところあるを見ず。かの公家の位階高くして四民の上に居り、しかも無能無力、衣冠束帶の風貌の外は何等活動の元氣なかりしと同様、古法を墨守し、古式を踏襲し、全く社會の外に超然たる觀あり。其の本歌取と稱して、古人の句を換骨奪胎する手際を貴びしは、たま／＼其の獨創の力なきを證し、又當時の尙古の風を示せるに外ならず。當時の散文が、古人の句を引證點綴せるものと其の精神全く相同じ。梵讚和讚より今様歌の發達し來れるは、一般文學の上に混和し來れる佛教の勢力の韻文の上に及びたるを證するものにして、連歌の發達は一面に於て窮屈なる和歌の法式を脱して遊戯三昧に入り、又其の無味單純を離れて、用語題目の範圍を擴張せるものといふべし。連歌は一人の作に非ずして、五十句百句を連ぬるも、尙全體としては何等の意味を成すものに非ず。篇中幾多變化の妙あるを尙ぶ。忽ちにして春、忽ちにし

隨筆

て秋、忽ちにして人事、忽ちにして風景、何物かの連鎖によりて、千種萬様の事件を前後續出せしむるなり。

當時の隨筆たる徒然草を見よ。古代を思念するの情は到る處に吐露せられたり。有職故實の講釋、極めて煩瑣なる知識も亦貴びて記載せられたり。訓誡と説法とは所在是あらざるなし。大體としては厭世の氣風に富む。之を平安朝の枕草子に比較すれば、其の差異頗る顯著なり。これ其の作者の境遇の異なるが爲のみならずして、實は時代の烙印の異ればなり。

平安朝文學に倣ひて作れるもの、土佐日記に對しては十六夜日記あり。大鏡に對しては水鏡あり、増鏡あり。今昔物語に對しては宇治拾遺物語あり、十訓抄あり、古今著聞集あり。文體に於て倣ひ得たるものあり、構造、脚色に於て倣ひ得たるものあり。然れども其の厭世的分子多き、教訓的分子多き、何れも時代の産物たるを

日記・紀行・假名
文の歴史

狂謠
言曲

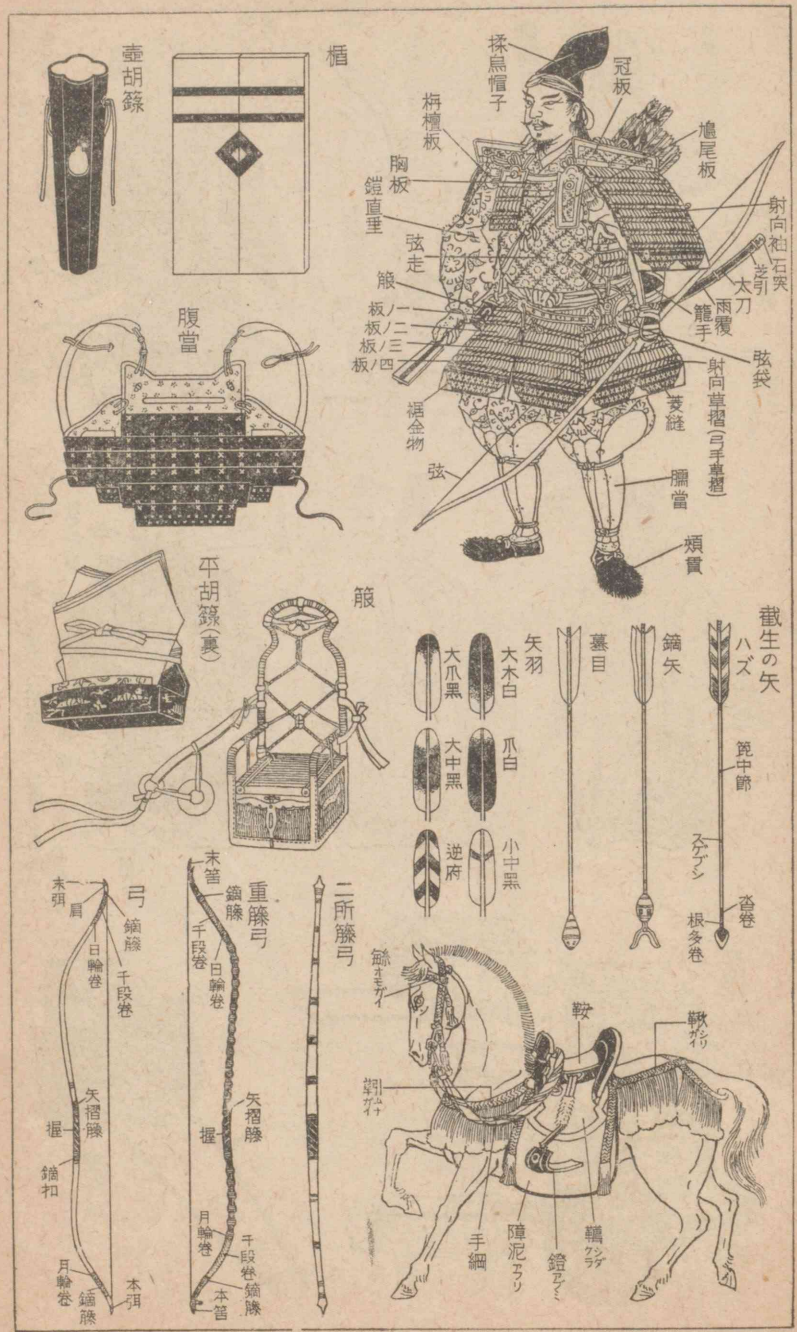
失はず。歴史の書として神皇正統記の如き、其の文體、其の思想、明らかに時代を證せり。紀行文の東關紀行、海道記に於ても亦然り。然れども、人若し近古時代を以て全く獨創なく、發達なかりし時代と思はば大なる誤ならん。近古時代に於て、文學上最著明の事件は、敘事詩の次第に戲曲化せられて、いはゆる劇詩の發達を見たる事なりとす。即ち能樂に伴ふ章曲として、謠曲及び狂言の發達せること是なり。能樂は古來の舞樂に本づきて、佛教より發達せる聲樂を加味し、一種の總合美術として發達せるものにして、謠曲は亦當時の文學の粹を集めて之を集大成せる觀あり。國民敘事詩として久しく民衆間に傳誦せられし軍記物語は勿論、歌人の金科玉條とせし伊勢物語、大和物語、源氏物語等の敘事物語は、皆採りて戲曲化せられたり。僧家の學も公家の學も、皆等しく其の中に收められたり。故に佛教の説教あり、有職の講釋あり。文章は、詩

歌朗詠今様の區別なく、古人の妙句佳章を十分に攝取補綴して、苟も何等かの縁あれば、必ずしも其の思想敘述の矛盾し、撞着するを厭はず。當時一般の文學の趣味、やがてかの連歌的趣味と稱すべきものは、能く其の上に發揮せられたり。しかも掛詞を用ひ、テニヲハを省き、其の文體を緊縮して、成るべく短き間に、成るべく多くの語句事實を連接して趣味多からしめたる修辭上の技巧としては、一進歩を見たりといふを得べし。

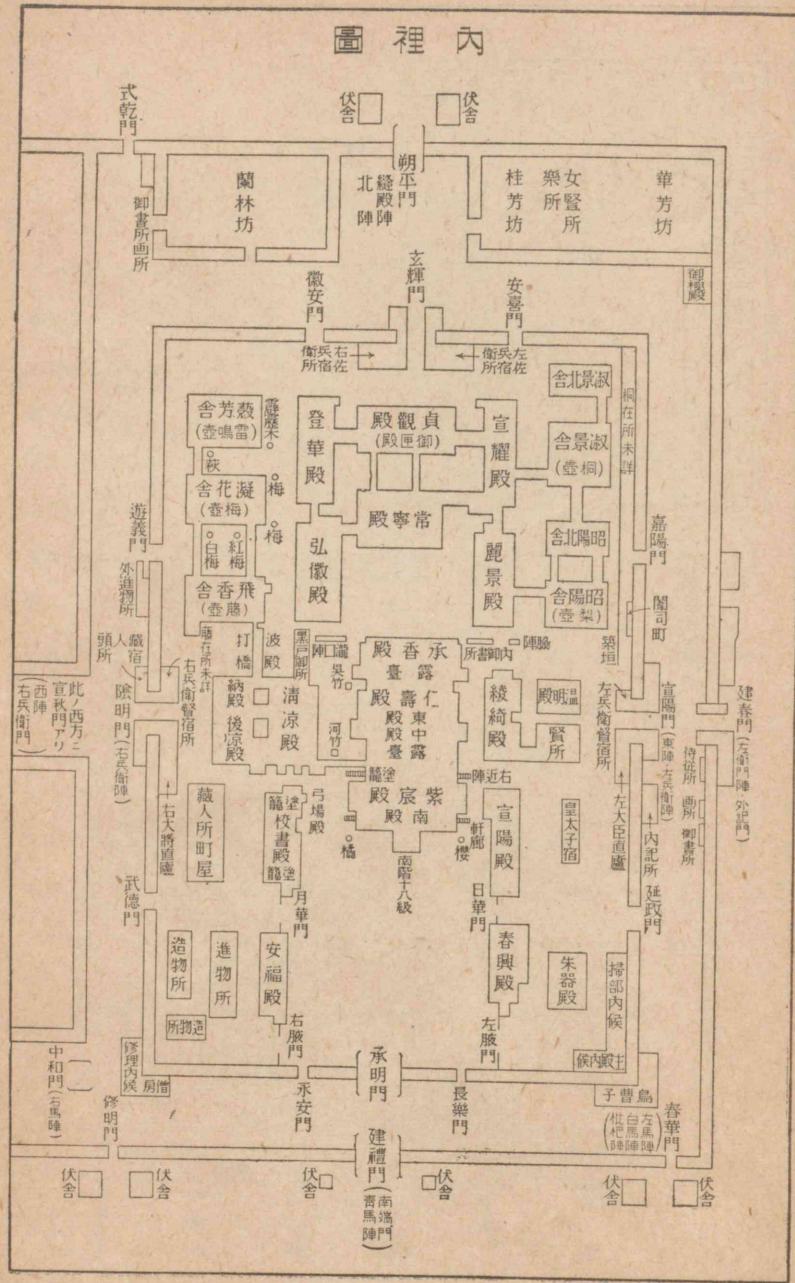
謠曲が幾多の英雄傳説歌人傳説を材料とせるに對して、狂言は各種の童話的材料を以て其の章曲を成し、彼が古文古句の補綴に力めたるに反して、此は當時の俗語を以て對話的に作成し、毫末も地の文を挿まず、純劇詩たる形式を備へたるは奇とすべし。唯彼は眞摯にして、此は滑稽。一方の悲劇的性質あるに比して、一方は喜劇的性質を帯びたる差あり。然れども謠曲の悲劇的性質あり

といふも、實は佛法の解脱を骨子とするを以て、寧ろ慰安満足に終るものなれば、純悲劇的とはいふべからず。神事能の如きは國土の安穩、治世の長久を歌ひて、吉慶を賀ぐを常とす。狂言の滑稽趣味や、將に來らんとする近世時代の先驅を爲すものといはんか。

(芳賀矢一氏の文に據る)



新制國語讀本 卷八終

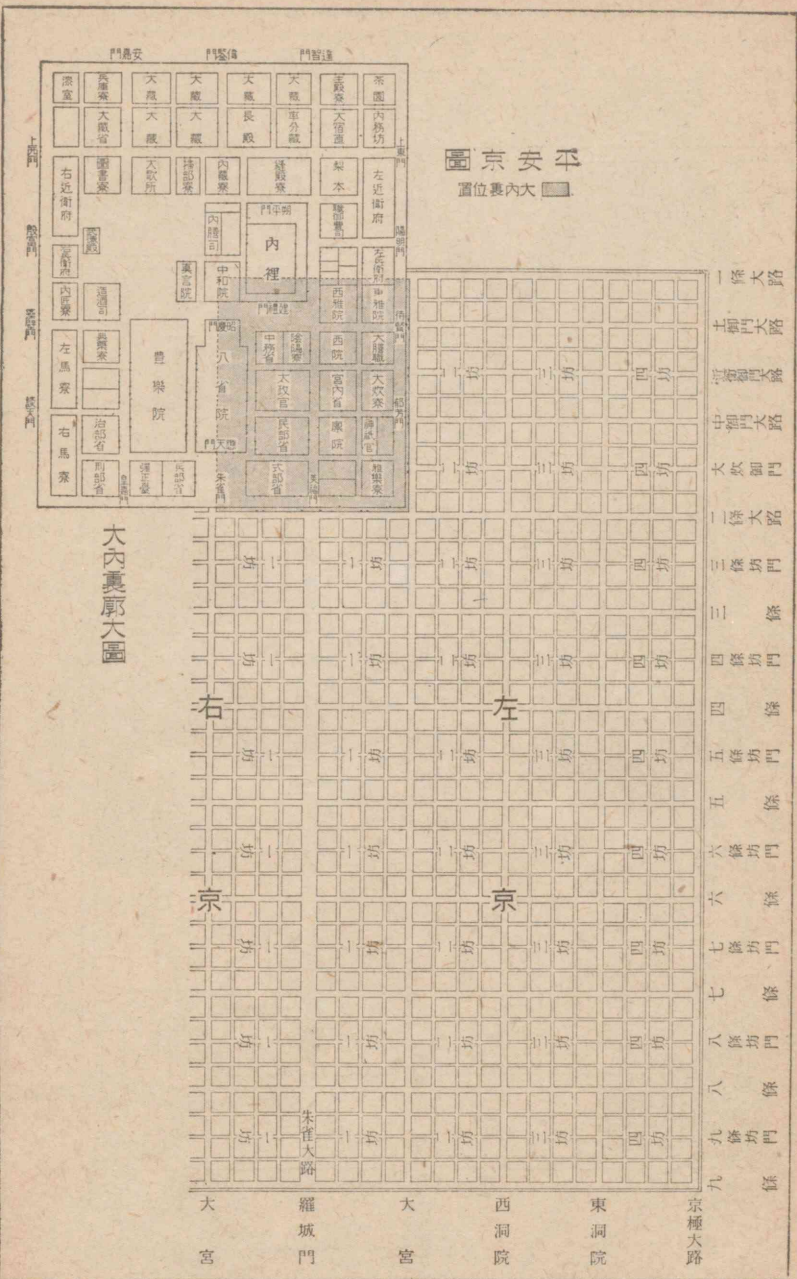
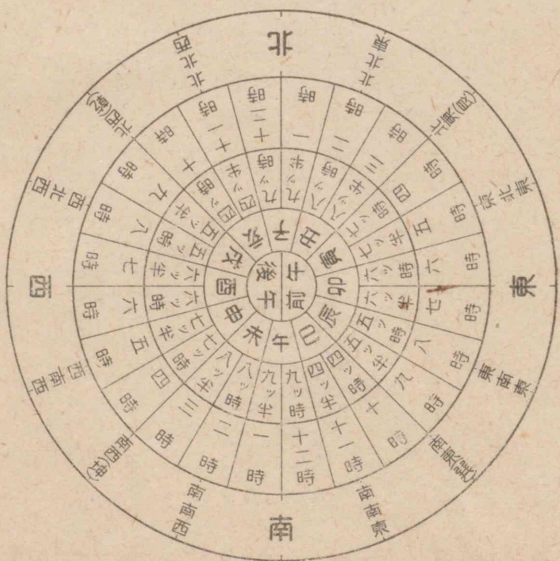


官職表

(大寶令と本基を合するもの)

他其	官	方	地	察	警	官	武	八	太	神	官
藏	國	大	右左	檢	右左	右左	右左	彈	政	祇	職
人	司	率	京	非	馬	兵	衛	正	官	官	官
所	守	府	職	違	寮	衛	門	臺	省	伯	等
頭	帥	大夫	別	當	頭	同	督	尹	卿	長	官
五	介	亮	佐	助	同	佐	將	弼	參	次	官
六	掾	監	進	尉	同	尉	監	忠	議	判	官
位	目	典	屬	志	屬	同	志	曹	少	祐	官
									中	史	典
									大	大	
									納	外	
									言	記	
									小	史	
									外		
									記		
									史		

方位及及びの時圖



願望	場所・方向	添加	重きを言外に含まむる	禁止	反語	疑問						
なむ	ばや	へ	に	さへ	すら	だに	な…そ	な	か	や	か	
む。世の汚をば知らであらな	心あらむ人に見せばや。	前へ進め。	机によりかゝる。	梓弓おして春雨けふ降りぬあすさへ降らば若菜つみてむ。	我身すら容れられず。	思ふこと筆にだに残さばや。	悪事をなせそ。	我をな忘れそ。	ゆめ忘るな。	唯か知らざらむ。	豈我のみならむや。	有るか無きか。

係結			条件				假定				
こそ	なん	か	や	ぞ	ども	ど	ば	とも	と	ば	
人こそ見えね。	善くなむ見ゆる。	いづれかまさされる。	花や散りし。	見てぞ思ふ。	見れども見えず。	美しけれどとげあり。	波風止まねば同じところ にあり。	品よければ買ひぬ。	問へば答へ、問はざれば 答へず。	繪にかくと筆も及ばず。 よろづよ經とも色はかは らじ。	急かざばぬれざらまし。

語		尾				接							
がてら	がまし	らし	ぶる	さぶ	ばむ	めく	げ	み	さ	へ	さま	ばら	たち
散歩がてら。	をこがまし。隔てが まし。	男らし。女らし。	學者ぶる。	神さぶ。	けしきばむ。汗ばむ。	時めく。春めく。	にくげ。心ありげ。	青み。深み。	行くき。歸るき。	ゆくへ。片へ。	神様。	殿ばら。奴ばら。	親たち。公だち。

紛れ易き品詞(文語)

ね		らむ		なり				たり		語		
助完了動詞	助打消動詞	時の助動詞 未來完了	助動詞 推量の	形容動詞 の語尾	助動詞 詠歎の	助動詞 指定の	動詞	形容動詞 の語尾	助動詞 指定の	時の助動詞 現在完了		
とく行きね。	人こそ知らね。	生けらむ。	散るらむ。	山紫に水明らかなり。	蟲の聲すなり。	日はくるゝなり。	花の美しきなり。	彼は軍人なり。	事業愈なりぬ。	水洋々たり。	父父たり、子子たり。	花咲きたり。
ばや		な		なむ		ぬ		しか		語		
問の助詞	助動詞 願望の	助動詞 感動の	助動詞 完了の	禁止の助詞	係の助詞	助動詞 願望の	未來完了の助動詞	助動詞 打消の	助動詞 完了の	過去の助動詞 と疑問の助詞	過去の助動詞	
心あてに折らばや折らむ。	心あらむ人に見せばや。	知らじな。	花散りなば。	ゆめ忘るな。	花なむ咲く。	花咲かなむ。	花咲きなむ。	こぬをまつ。	花咲きぬ。	君はこの本をよみしか。	斃るゝまでこそ戦ひしか。	

助詞の用法(文語)

禁止	反語		疑問		種用法別
な…そ	な	か	や	か	や
我をな忘れそ。	ゆめ忘るな。	唯か知らざらむ。	豈我のみならむや。	有るか無きか。	有りや無しや。
種用法別					
條假定					
ば	とも	と	ば		
品よければ買ひぬ。	問へば答へ、問はざれば答へず。	繪にかくと筆も及ばず。よろづよ經とも色はかはらじ。	急かざばぬれざらまし。	明日晴天ならば遠足せむ。	急かざばぬれざらまし。

接		語										接												
さ	へ	さま	ばら	たち	がた	ら	ども	ほの	ひが	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
行くき。歸るき。	ゆくへ。片へ。	神様。	殿ばら。奴ばら。	親たち。公だち。	君がた。殿がた。	汝ら。我ら。	物ども。事ども。	ほの見ゆ。ほの暗し。	ひがめ。ひが事。	ま直中。ま心。	さ夜。さ迷ふ。	か弱し。か細し。	お顔。	み吉野。み空。	逸早し。	もの淋し。	生紙。生薬。	けうとし。け壓る。	た謀る。た走る。	第一。第二。	彌高し。彌増す。	うひ陣。うひ學び。	を川。を暗し。	用例

35

昭和十二年七月廿六日
昭和十三年七月卅一日
昭和十三年一月十五日
印刷
發行
修正再版發行

新制國語讀本

定價 卷一—卷九 各六拾錢
卷十 各五拾八錢

新東條國文



不許複製

編者

東條操
東京市神田區神保町一丁目一番地

發行者

三省堂
代表者 龜井豐治

印刷者

三省堂蒲田工場
代表者 喜多見昇

發行所

(東京市神田區神保町一ノ五五)
振替口座東京三一五五五
株式三省堂
株式三省堂大阪支店
(大阪市西區阿波座下通二ノ六)

